

諏訪原遺跡

1996

熊本県玉名郡

菊水教育委員会

諏訪原遺跡

1996

熊本県玉名郡

菊水教育委員会

序

菊水町教育委員会では、平成7年度国庫補助事業による前原長溝甕棺群の詳細分布確認調査を実施いたしました。

当地では、菊水町中心部にある諏訪原台地の北端に位置し、諏訪原遺跡と隣接しています。

今回調査いたしました、前原長溝甕棺群から弥生時代中期の甕棺墓、諏訪原遺跡から弥生時代後期の竪穴式住居跡、住居床面よりヒトの足跡が数多く出土いたしました。我々祖先の足跡が長い年月を経て、今日に遺されてることに自体不思議な気がしますが、それと同時に大変貴重であると言えるでしょう。

本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深め、保護・研究に役立てば幸いです。最後になりましたが、調査にあたって終始ご指導いただいた別府大学の坂田邦洋博士、多大なご協力とご理解をいただきました地権関係者並びに関係各位の皆様には、重ねてお礼申し上げます。

平成8年1月30日

菊水町教育委員会

教育長 倉 光 菊 生

例 言

1. 本書は、平成7年度に菊水町教育委員会が菊水町大字原口字雀迫と字辻で実施した「前原長溝甕棺群の詳細分布確認調査」（国庫補助事業）の報告書である。
2. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章及び附前原長溝甕棺群を益永浩仁が、第Ⅳ章と第Ⅲ章11・12を坂田邦洋が担当した。本書の編集は益永が行った。
3. 本書に使用した方位は磁北である。竪穴住居の主軸方位及び甕棺の主軸方位は北を基準にしている。甕棺の傾斜は水平面からの傾斜角度を測定した。レベルは、すべて標高で示している。
4. 竪穴住居、出土遺物、甕棺などの遺構・遺物の縮尺は解説末に記した。
5. 本書にかかる出土遺物は、菊水町歴史資料館で保管している。
6. 発掘調査及び本書の作成にあたり、別府大学坂田邦洋助教授、山鹿市立博物館中村幸史郎副館長並びに県立玉名工業高等学校赤瀬 恵教諭に御指導・御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 遺跡の概要	1
1. はじめに	1
2. 調査の目的と経過	1
3. 調査の組織	4
第Ⅱ章 竪穴住居跡	5
1. 竪穴住居跡の調査	5
2. 1号住居跡	7
3. 2号住居跡	7
4. 3号住居跡	8
5. 4号住居跡	9
6. 5号住居跡	9
7. 6号住居跡	10
8. 7号住居跡	11
9. 8号住居跡	12
10. 9号住居跡	13
第Ⅲ章 出土遺物	14
1. 1号住居跡	14
2. 2号住居跡	17
3. 3号住居跡	18
4. 4号住居跡	18
5. 6号住居跡	20
6. 7号住居跡	21
7. 8号住居跡	22
8. 9号住居跡	24
9. 土製品	25
10. 鉄製品	26
11. 炭化物	26

12. 炭化材	28
13. 住居跡の土器（まとめ）	28
第IV章 足跡について	30
1. 足跡の発掘	30
2. 足跡の出土状況	31
(1) 1号住居跡の動物 (2) 1号住居跡のヒトの足跡 (3) 2号住居跡の足跡	
(4) 3号住居跡の足跡 (5) 4号住居跡の足跡 (6) 7号住居跡の足跡	
(7) 8号住居跡の足跡 (8) 9号住居跡の足跡 (9) 足型	
3. 竪穴住居の人口	34
(1) 足跡の判定	
(2) 家族人口	
(3) 床面積と人口	
附 前原長溝変棺群	37
1. 調査経過	37
2. 変棺の調査	37
(1) 変棺の分布 (2) 1号変棺 (3) 2号変棺 (4) 3号変棺 (5) 4号変棺	
(6) 5号変棺 (7) 6号変棺 (8) 7号変棺 (9) 8号変棺 (10) 9号変棺	
(11) 10号変棺 (12) 高木1号変棺	
3. 変棺	43
(1) 1号変棺 (2) 2号変棺 (3) 3号変棺 (4) 4号変棺 (5) 5号変棺	
(6) 6号変棺 (7) 7号変棺 (8) 8号変棺 (9) 9号変棺 (10) 10号変棺	
(11) 高木1号変棺	
4. 変棺の編年	49
(1) 墳丘墓変棺群の編年	
(2) 変棺群の編年	
(3) 前原長溝変棺群の編年	
参考文献	51

第Ⅰ章 遺跡の概要

1. はじめに (図1)

諏訪原遺跡は熊本県玉名郡菊水町大字江田・原口に位置し、東西約400m・南北約800mの諏訪原台地一帯に分布する遺跡である。また諏訪原台地にはいろいろな遺跡が点在している。台地南端には県指定史跡の若宮古墳があり、台地の北端に前原長溝甕棺群がある。菊水町の西端を菊池川が南流しており、この菊池川を見下ろすように舌状丘陵が横つも伸びており、本遺跡もその一つである。

熊本県北部の菊池川流域には、めぐまれた自然環境を背景にすぐれた古代文化が営まれた。菊水町には有名な江田船山古墳や塚坊主古墳などの多数の文化財が遺されている。諏訪原遺跡は弥生時代後期の大規模集落として注目されている。



図1 遺跡付近の地図 1/25,000

2. 調査の目的と経過 (図2・3)

1995年度の事業として国庫補助を受けて「前原長溝甕棺群の詳細分布確認調査」を実施した。調査対象地区は大字原口字雀迫と字辻であった。発掘調査は1995年7月7日から開始して、8月22日に終了した。発掘地は建設省第Ⅱ座標系の $X = -1.800km$ 、 $Y = -36.400km$ の付近に位置している。

1994年夏、大字原口字雀迫704番地に所在する「前原長溝甕棺群」遺跡の発掘が行われた。発掘の結果、直径約25m、高さ2.0-2.5mの墳丘の周囲に環壕をめぐらした弥生中期の墳丘墓が見つかった。墳丘内から21基の甕棺と、その中から人骨が出土した。人骨の中には、人工的に頭蓋を変形した「人口変形頭蓋骨」の壮年女性人骨があつて注目される。この地は大字原口字雀迫であるが、遺跡台帳には「前原長溝甕棺群」と登録されている所なのでそれに従った。大字前原字長溝と隣接しているので誤って伝えられたのであろう。

昭和47年、農作業中に甕棺が発見され高木誠治・正文阿先生によって調査が行われた。その地点は字雀迫726-1番地ということであった。そこで「前原長溝甕棺群」遺跡の甕棺が723-726番地一帯に広がっているのではないかと考えられたので、甕棺の詳細分布調査を実施することになった。

発掘は字雀迫724番地と726-1番地で実施した。発掘の結果、この地域からは弥生後期の住

居跡が9基発見されたものの、甕棺は出土しなかった。字雀迫724番地と里道を挟んで西隣にある字辻723番地を発掘したところ甕棺群（10基）が発見された。昭和47年に発見された甕棺はこの地（723番地）であったことが後になって判明した。甕棺群のほぼ中央から昭和47年発掘の甕棺の土壌が見つかった。

住居跡群が発見された724—726番地一帯は、遺跡台帳では諏訪原遺跡（弥生後期・古墳時代集落）の北端に位置しているので、『諏訪原遺跡』とした。字辻723番地からは甕棺群が出土しており、昨年（1994）度調査した「前原長溝甕棺群」がここまで掘りをみせていることが判明したので、723番地出土の甕棺群の遺跡名は「前原長溝甕棺群」と呼称することにした。

諏訪原遺跡は東西400m、南北800m程の掘りがあり、ほぼ中央を東西に九州縦貫自動車道が貫通している。昭和44・45年、高速道の工事に先立つ発掘において弥生後期から古墳時代までの住居跡が多数発掘されている（緒方、1971）。昭和57年に行われた遺跡確認調査においても住居跡が出土している（池田、1982）。



図2 遺跡付近の地図 1/2,500

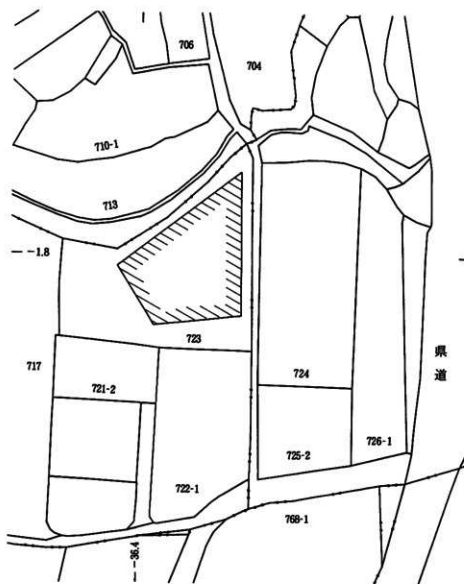


図3 遺跡付近の半図

1/1,000

3. 調査の組織

調査主体は菊水町教育委員会。調査責任者倉光菊生（町教育長）。調査主任益永浩仁（町教委社会教育課主事）。事務局：西川義治（社会教育課課長）・永井一誠（同課）課長補佐）・坂本政光（同課）係長）・高木隆知（同課）係長・松葉朝子（同課）係長・堤郁子（同課）主査）。

発掘調査に参加された方々は次のとおり。

坂田邦洋（別府大学文学部助教授・文学博士）。赤瀬 恵（県立玉名工業高等学校教諭）。中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）。高木誠治（菊水町）。

小林ツヨシ、友口絹子、森 深、赤松 實、杉本ツヤ子、浦田律子、笹岡実子、志垣恵美、田尻由香、阿南美香（菊水町）。坂田邦彦（大分東明高校生徒）。宮崎布美子（別府大学生）、内賀嶋公成（同）。楠木村組（石原堅志）。文化財環境整備研究所（丸山武水・関年勝ほか）。なお発掘調査に当たり県教育委員会文化課の諸先生（松本健郎（主幹）・高木正文（参事）・長谷部善一（学芸員））並びに玉名市立歴史博物館田辺哲夫館長・西田道世副館長から御指導及び御教示をいただいた。

地主及び地元協力者：船津 均・近延洋子・紫尾正昭

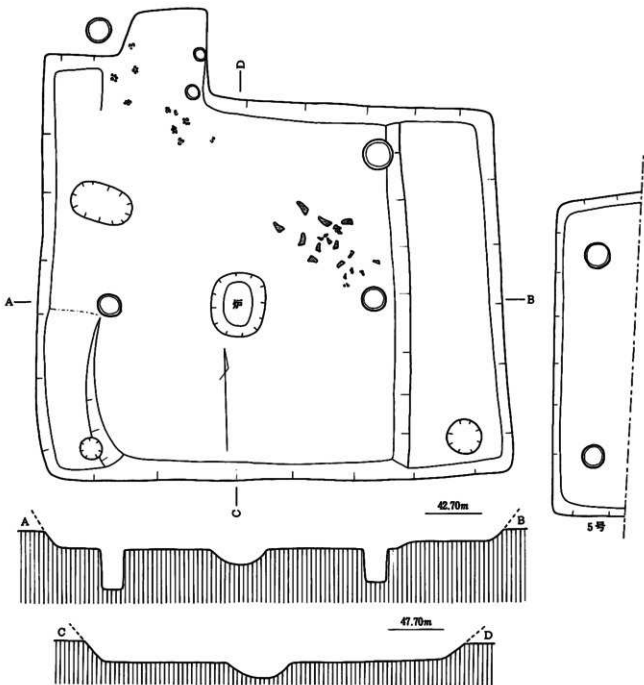


图5 1号住居跡実測图 1/50

れた5号・6号住居跡は竪穴住居の西端の一部を露出したにすぎない。2・9号住居跡は半分を露出した。残りの5基は全面発掘ができた。

竪穴住居は、平面形が長方形になり、東西に長軸を、南北に短軸がくる例が多かった(8基)。9号住居跡だけが長軸が南北に位置していた。竪穴住居同志が隣接した例はあるが(1号と5号、3号と4号)、重なり合った住居跡は1例もみられなかった。適当な間隔をおいて配置されているように見受けられる。

竪穴住居群はいずれも弥生時代後期末に編年される。単一時期の竪穴住居群であったことが分かる。出土した土器にはそれほど大きな編年差(形式差)がみられない。また住居の中には重複した例もみられない。したがってこれらの竪穴住居はほぼ同時期に営まれていたとも考えられる。時期的に分割されたとしても30~50年以下の年代の開きであろう。

2. 1号住居跡(図5、図版1)

1号住居跡は、2号の南、7号の北に位置し、5号住居が隣接している。平面形は東西方向の長方形。大きさは東西6.30m、南北5.00m、遺構面からの深さ28cm。竪穴住居の東側に南北方向の幅1.20mのベッドが設けられている。竪穴の北壁両端付近を北側に拡張して入口を設けている。入口の長さ(南北) 1.10m、幅(東西)1.20m。長軸N—93度—E。

主柱は東西主軸線上に2本建つ。主柱の大きさは直径32cm・深さ53cmと直径30cmと深さ55cm。補助柱(支柱)が北壁の東西両端にみられる(41×30、35×40cm)。入口の構造を支えるための柱が2本南北にならんでいる(23×52、22×20cm)。竪穴の内部に炭化材と灰が多量に堆積していたので、1号住居跡は焼失したものとみられる。

炉跡は住居の中央部に位置しており楕円形をして皿状に窪んでいる(径84×72cm、深さ21cm)。竪穴の東南隅に円形の貯蔵穴がある(55×43×30cm)。入口から奥に入った所に楕円形の大きな貯蔵穴がある(80×50×50cm)。この貯蔵穴から鉢・高坏・土製勾玉・土製玉が出土した。なおベッドの北端面から鉄製の鉋と鎌が出土した。

竪穴住居の床面は粘土によって床張り(張り床)が行われていた。床面に張り付いていた土器を取り上げたところ、床面から足跡が発見された。炉と東側支柱を結ぶ線の北側にヒトの足跡群が見られた。竪穴内の入口付近にイヌ(犬)とブタ(豚)の足跡群が遺されていた。

3. 2号住居跡(図6、図版1)

2号住居跡は東西方向の長方形と推定される。東側の半分が発掘された。西半分はトレンチの壁の中に入っており未発掘。平面形の大きさは東西長4.80m(推定、現在長2.90m)、南北3.90m。遺構面からの深さ18cm。竪穴住居の東壁に南北方向に幅1.0mのベッドが設けてある。主軸N—97度—E。

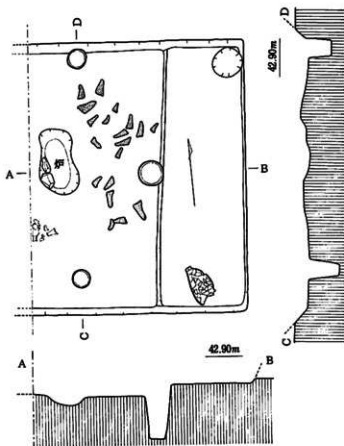


図6 2号住居跡実測図 1/50

主柱は東西主軸線上に2本あったものとみられ、東側の1本が見つかっている(33×62cm)。補助柱が、南北両壁の中央に1本ずつ建っている(22×28、20×25cm)。竪穴内の床面付近から炭化物が多量に出土したので、2号住居は焼失したらしい。炉跡は住居の中央部に位置しており、楕円形をして皿状に窪んでいる(80×40×14cm)。

床面は粘土張りになっている。床面に張り付いていた土器を取り上げたところ、粘土の床面にヒトの足跡が多数みられた。

4. 3号住居跡(図7、図版2)

3号住居跡は4号の東隣に位置している。平面形は東西に長く、南北に短い長方形。長軸(東西)4.50m、短軸(南北)3.00m。遺構面からの深さ30cm。東壁を40cmほど東側に拡張している。竪穴の中から炭化物と灰が出土したので、3号住居は焼失したらしい。長軸N—102度—E。

支柱は4本になるが、平行四辺形に配置されている。支柱の大きさは、32×48、31×50、30×48、27×58cm。炉跡は住居内の西寄りに設けてある。楕円形をしている(68×42×16cm)。南壁中央付近に貯蔵穴とみられる円形の穴がある(28×18cm)。

床面は粘土張りがなされていた。床面に張り付いていた遺物を取り上げたところ、粘土床からヒトの足跡が見つかった。

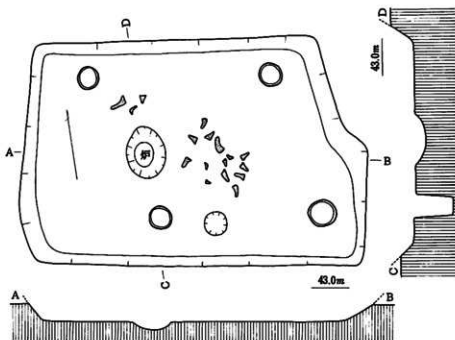


図7 3号住居跡失速図 1/50

5. 4号住居跡(図8、図版2)

4号住居跡は3号住居跡の西隣にある。平面形は東西に長く、南北に短い長方形。長軸(東西)は4.60m、短軸(南北)3.30m。遺構面からの深さ42cm。堅穴の中から炭化物と灰が多量に出土したので、4号住居は焼失したものらしい。長軸N—97度—E。

支柱は東西に2本ある。やや対角状に配置している。大きさは21×43、23×56cm。炉跡は住居のはほぼ中央にある。平面円形で皿状に窪んでいる(62×50×18cm)。北西隅と南東隅に円形の小穴がみられる(28×16、23×17cm)。補助柱であろうか。南壁の中ほどに貯蔵穴とみられる円形の穴がある(44×23cm)。

床面は粘土によって床張りがなされたが、毎日よく使用している床面の大部分は粘土が消耗して(磨り減る)数センチだけ低くなっている。床の粘土がないので、床面はやや軟らかくなっている。堅穴の南壁と北壁付近はヒトの出入りが比較的少なかったのでであろう、粘土の床が保存されていた。その粘土面にヒトの足跡が多数遺っていた。4号住居の場合、床面の張り床の消耗具合から見て、入口は西側にあったらしい。

6. 5号住居跡(図5、図版1)

5号住居跡は1号住居の東隣にある。5号住居の大部分はトレンチの壁の中にあって未発掘。東西に長軸をもつ長方形の堅穴住居の西側端だけを発掘できた。大きさは、長軸(東西)長不

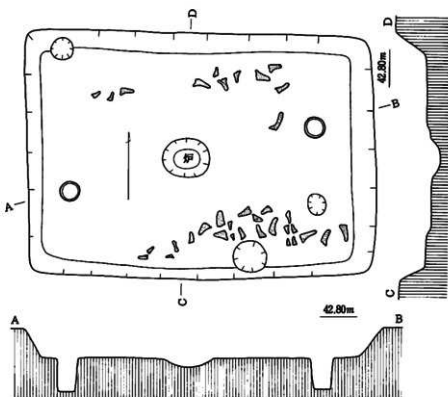


図8 4号住居跡実測図 1/50

明（現在長1.10m）、短軸（南北）4.20m。遺構面からの深さ38cm。支柱は4本とみられ、西側の2本が見つかっている。床面はほんの一部分だけの露出であったから、張り床されていたのかどうか、ヒトの足跡が付いているのかどうか、分からない。遺物は出土していないけれども、1号住居に平行に建てられているから、1号住居と密接な関わりがあるらしい。

7. 6号住居跡（図9）

6号住居跡は、今回調査した竪穴住居群の南端に位置している。東西に長軸をもつ長方形の竪穴住居であるが、大部分はDトレンチの壁面にあつて、竪穴の西側端が発掘されたにすぎない。短軸（南北）3.20m、東西の現在長1.20m。遺構面からの深さ25cm。支柱は4本だったらしく、西壁近くから2本見つかっている（28×45、32×50cm）。竪穴内部の床面が一部露出できたけれども、

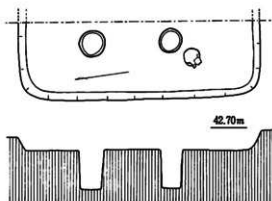


図9 6号住居跡実測図 1/50

その部分には床張りはなかった。床面から鉢が出土した。

8. 7号住居跡 (図10、図版1)

7号住居跡は1号住居跡の南に隣接している。平面形は南北にやや長く、東西がやや短い長方形。大きさは長軸(南北)6.00m、短軸5.10m。遺構面からの深さ48cm。東壁に南北方向に幅0.9mのベッドを設けている。7号住居は1度だけ建て替えている。その際堅穴が北側に少しだけ拡張されたため、南北がやや長くなったものとみられる。堅穴の内部は炭化材と灰が多量に堆積していたので、7号住居は焼失したものらしい。建て替えの際、床面の一部に粘土を張って補修している。以前の床と補修後の床に同一人物とみられるヒトの足跡がみられる。長軸N-6度-E。

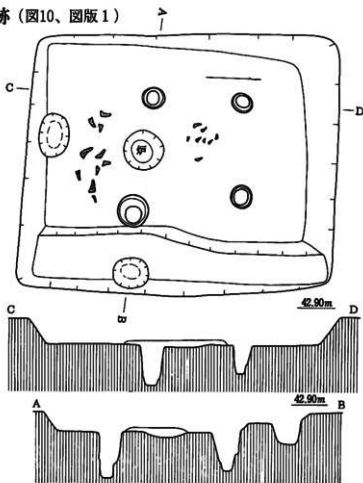


図10 7号住居跡実測図 1/50

て補修している。以前の床と補修後の床に同一人物とみられるヒトの足跡がみられる。長軸N-6度-E。

支柱は4本とみられる。堅穴の中央付近に4本まとまっている。柱間は210cm程である。支柱の大きさは、66×70cm、40×60cm、38×60cm、40×58cm。支柱の内部は柱根が二重になっているから、一度建て替えられていることが分かる。建物の入口は北壁か北東隅付近にあったらしく、堅穴の北東隅の外側に柱穴が1本見つかっている。入口側の床面が消耗して粘土が磨り減ったらしい。そのため建て替えの際、炉の北側だけに、新しく粘土が張られた床面が造られた。ヒトの足跡が、新しい床面と、奥壁(南壁)に近い旧床面の両方から見つかった。

炉は円形をしており、住居の中央よりやや南寄りにみられた(78×18cm)。貯蔵穴とみられ

る穴が南壁付近(78×60×41cm)と東壁付近(69×60cm)にあった。南壁付近の貯蔵穴は建て替え前のもので、東壁のそれは建て替え後である。

9. 8号住居跡(図11、図版2)

8号住居跡は3・4号住居跡の北側、9号住居跡の南側に位置する。平面形は東西に長く、南北に短い長方形。大きさは、長軸(東西)6.00m、短軸(南北)4.00m。遺構面からの深さ36cm、ベッドが東壁と北壁に幾形に配置されている。竪穴の床面に炭化物と灰が相当量みられ

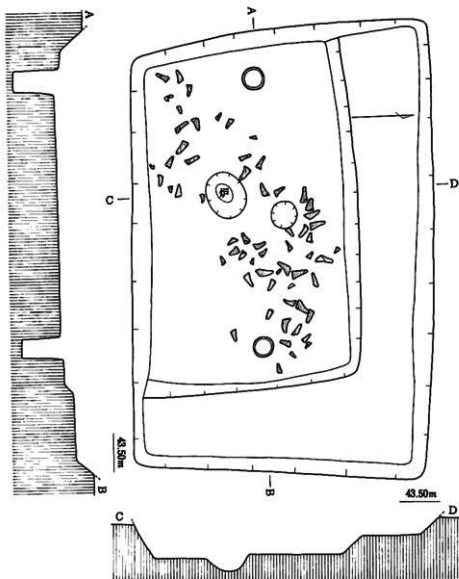


図11 8号住居跡実測図

1/30

たので、8号住居跡は焼失したものらしい。

支柱は長軸（東西）線上に2本建っている（ 28×52 、 $30 \times 60 \text{ cm}$ ）。炉は住居の中央よりもやや南寄りにあった（ $62 \times 50 \times 22 \text{ cm}$ ）。炉の北側に平面円形の貯蔵穴とみられる穴があった（ $34 \times 24 \text{ cm}$ ）。床面の土器の出土数は8号住居跡のものが最も多かった。長軸N—97度—E。

床面は粘土で床張りがなされていた。住居の北西側と南東側は粘土床が使用によって消耗してしたので、やや低めになり、やや軟らかくなっているため、ヒトの足跡らしい落ち込みがあるにはあるが、露出が難しい。床面の北東—南西方向の対角線上の粘土の床の遺りが良かった。そこからヒトの足跡が多数見つかった。

10. 9号住居跡（図12、図版2）

9号住居跡は、住居群の北端に位置しており、しかも9号だけが南北に長い長方形。南側半分だけ発掘した。平面形の大きさは、長軸（南北）5m（推定、現存長2.6m）、短軸（東西）3.0m。遺構面からの深さ10cm。ベッドが南側に東西方向に設けてある（幅60cm）。

支柱は南北に2本あったらしく、南側の1本が発掘された。支柱の位置と貯蔵穴が重なっていた。そのため、支柱の周囲に粘土をめぐらして貯蔵穴との間に障壁が設けてあった。支柱の大きさは径22cm、深さ56cm。貯蔵穴は $98 \times 60 \times 36 \text{ cm}$ 。住居のほぼ中央に円形の炉が掘られている（ $52 \times 20 \text{ cm}$ ）。長軸N—15度—E。

床面は粘土で床張りされている。9号住居跡も火災に遭ったらしくて、粘土の床面が多少熱を受けていた。粘土の床の保存が比較的良かった部分にヒトの足跡がみられた。

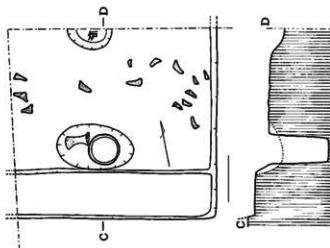


図12 9号住居跡実測図 1/50

第三章 出土遺物

1. 1号住居跡(図13・14)

1号住居跡の床面からは脚台付甕(1・2番)、甕(3・4番)、脚付鉢(5番)、鉢(6番)、高坏(7・8番)が出土した。床面からはこれらの土器のほか土製品(図22)や鉄製品(図23)が出土している。

脚台付甕(図13の1番)：口径16.7cm、高さ28.2cm、胴径17.2cm、底径6.0cm。口縁部はく字形に外反している。口唇は角張る。胴部はそれほど膨らまず長胴になる。脚台は基部でくびれて(径6.8cm)、やや内反りになっており、低い(4.0cm)。甕の外表面はタタキ目の後ハケ目調整を行っている。胴の中部にタタキ目が横方向にみられる。ハケ目は縦方向に調整している。底部付近はさらにナデ調整する。口縁部は内外面ともにナデ調整。内面はハケ目調整。上部のハケ目は短くて密に調整しているが、下部の方は長めで、やや荒い。胎土は黒褐色で砂粒が多い。胴部に煤が付着している。

脚台付甕(2番)：口径19.6cm、高さ33.0cm、胴径21.6cm、底径13.0cm。口縁部はく字形に外反する。口唇は角張る。胴部は膨らんでおり、最大径がやや上位にある。脚台は基部がくびれ(径6.4cm)、内反して低い(3.0cm)。甕の外表面は横方向のタタキ目のあと縦方向のハケ目調整を行っている。口縁と底部はナデ調整を行っている。内面はハケ目調整が右上方に見られる。底部は内外共に施珠巣状にハケ目が展開する。胎土は黒褐色で砂粒が多い。胴部に煤が付着している。

甕(3番)：口径18.6cm、現存高17.0cm、頸部径7.2cm。赤色の良質粘土を使用して作られている。赤褐色を呈し、硬質である。口縁部が大きく外反しており、頸部がくびれる。頸部にヘラ先による列点文が1列めぐり。外面はタタキ目を縦方向のハケ目調整できれいに消しているものの、口縁部に少しだけタタキ目が見られる。内面は口縁部は横方向にハケ目調整されているが、胴部はナデ調整される。

甕(4番)：大型の甕の胴部破片である。頸部に断面三角形の凸帯があり、その下に斜格子目文がめぐり。頸部の径17.0cm。胴部の外面はタタキ目のあとハケ目調整を行う。胎土は黒褐色で砂粒が多い。

脚付鉢(5番)：口径13.4cm、高さ14.0cm、底径7.5cm。口縁部は内反り気味のく字形口縁になる。胴は大きく膨らむ(径17.0cm)。脚大の基部は小さくくびれており(径4.0cm)、内反りになっている(高さ2.5cm)。外面は肩をハケ目調整しているほかはナデ調整である。内面もナデ調整。胎土は黄褐色で砂粒が多い。

鉢(6番)：口径17.0cm、高さ8.5cm。口縁部はやや内弯している。胎土は灰褐色で砂粒が多い。外面は正面に赤褐色の火樺状の線が10数本みられる。何かを描いた絵文様の様にもみえ

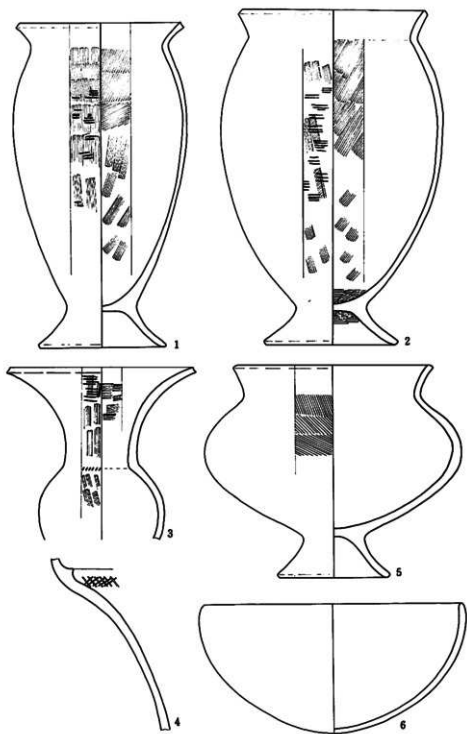


図13 1号住居跡出土の土器（1—4 番=1/4, 5・6 番=2/8）

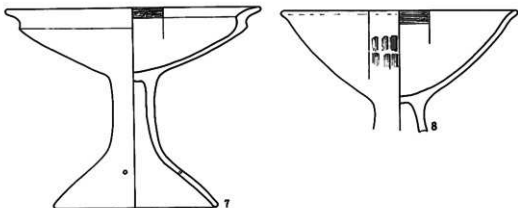


図14 1号住居跡出土の土器（7番=1/4、8番=2/5）

る。器面は内外共にナデ調整。この土器は住居跡西側に掘られた貯蔵穴の中から8番土器、土製勾玉と共に出土した。

高坏（7番）：口径25.4cm、高さ19.6cm、底径16.4cm、坏の高さ7.0cm、脚の長さ18.4cm。口縁は角張って外反する。坏は直線的になり浅い。脚の上半分は筒形で、下半分は外反りに開いている。前後に1個ずつ孔がみられる。脚の内部上半はへら様のもので成形している。内外面のハケ目のあとナデ調整を行っている。口縁の内面にだけ横方向のハケ目がみられる。胎土は赤褐色を呈しており明るい。

高坏（8番）：口径15.6cm、坏部の高さ6.3cm、坏部は鉢形に開いており、口縁は僅かに反る。内外面共にナデ調整のあと、一部にハケ目を入れる。胎土は黄褐色で砂粒が多い。脚は故意に打ち欠かれたらしい。6番の鉢と同じ貯蔵穴内で出土しているから、これの蓋に使用していたらしい。

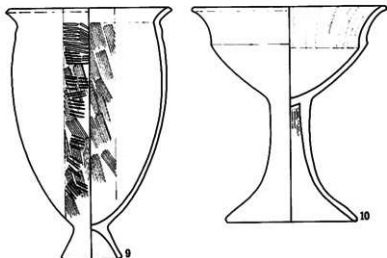


図15 2号住居跡出土の土器（9番=1/4、10番=2/5）

2. 2号住居跡 (図15)

脚台付甕 (9番) : 口径16.4cm、高さ24.7cm、底径6.0cm。口縁部はく字形になり、口唇は角張る。胴は膨らまずに胴長になる。脚台の基部はくびれ (径3.2cm)、小さな脚が付く (高さ3.0cm)。甕の外面はタタキ目が強く付いている。その後、縦方向のハケ目が浅くみられる。内面は長めのハケ目調整。脚部は内外共にナデ調整。胎土は黒褐色で砂粒が多い。外面に煤が付着している。

高坏 (10番) : 口径19.0cm、高さ21.2cm、底径13.0cm、坏の高さ9.5cm、脚の高さ11.7cm。口縁部は大きく外反する。口唇から3.5cm下がった所に肩ができる。内外両面共にナデ調整のあ

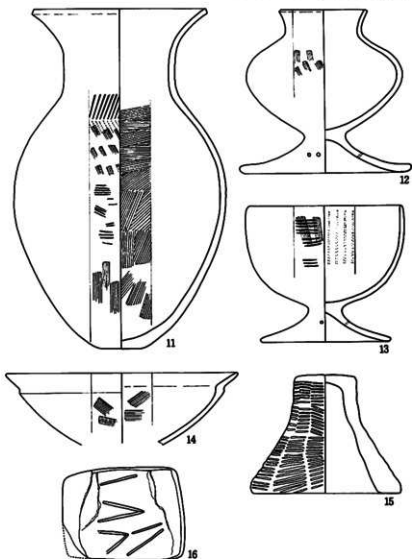


図16 3号住居跡出土の土器と石製品
(11・14番=1/4、12・13・15・16番=2/5)

とベンガラを塗る。内面の口縁部は縦方向の暗文がめぐる。脚の下半分は外反りに開く。脚の内面上部はヘラ様のもので調整している。胎土は赤褐色で砂粒多い。

3. 3号住居跡(図16)

3号住居跡の床面から壺(11番)、脚付鉢(12・13番)、高坏(14番)、器台(15番)、石製品(16番)が出土した。

壺(11番):口径17.4cm、高さ33.6cm、底径4.0cm、胴径10.8cm。頸部は垂直に立ち上がる。口縁部は大きく外反する。肩はなめらかに胴へ移行する。胴はそれほど膨らまずに胴長になる。小さな平底になる。頸部はハケ目の原体を押し付けている、上段は強く、下段は弱く押し付けて、く字形に仕上げる。壺の外表面はタタキ目のあとナデ調整を行い、さらにハケ目調整。内面はハケ目調整。ハケ目は上半分は横方向に、下半分は縦方向に付く。胎土は黒褐色で砂粒が多い。

脚付鉢(12番):口径5.8cm、高さ10.8cm、底径11.5cm。口縁部は小さく外反する。胴部は大きく膨らむ。脚は基部が小さく(径2.6cm)大きく開いている(高さ2.4cm)。脚には3カ所に2個ずつ孔が開いている。器面は内外両面共にナデ調整。外面の胴部に小さなハケ目がみられる。胎土は灰褐色の砂質粘土。

脚付鉢(13番):口径10.0cm、高さ9.0cm、底径8.6cm。口縁部はやや内反りで立ち上がる。脚の基部は小さくくびれ(径2.2cm)、大きく開いている(高さ2.0cm)。表裏に1個ずつ孔がある。外面はタタキ目の後でナデ調整を行う。さらに口縁部をハケ目調整する。内面はナデ調整。さらに縦方向の暗文がみられる。胎土は黄褐色で砂質粘土。

高坏(14番):口径23.0cm、現存高7.2cm。口縁は角張って外反している。坏部は浅い。この高坏は1号住居跡出土の高坏(7番)の形によく似ている。内外両面はナデ調整のあと、まばらなハケ目がみられる。胎土は黒褐色で砂粒が多い。

器台(15番):高さ8.8cm、底径10.0cm、上面径4.0cm。器台の上面は塞がっており平坦になっている。外面と上面はタタキ目調整。内面はナデ調整される。

石製品(16番):軽石を縦6.2、横8.1、厚さ6.2cmの直方体に仕上げている。さらに表側を幅2mmの沈線で線彫りしている。

4. 4号住居跡(図17)

4号住居跡の床面から脚台付甕(17—19番)、壺(20・21番)、高坏(22番)、鉢(23番)、小型鉢(24番)が出土した。

脚台付甕(17番):口径19.0cm、胴径20.8cm、高さ35.7cm、底径12.3cm。口縁部は外反してく字形になる。胴の最大径は中位にあり、長胴になる。脚の基部は大きめ(径7.0cm)で、直

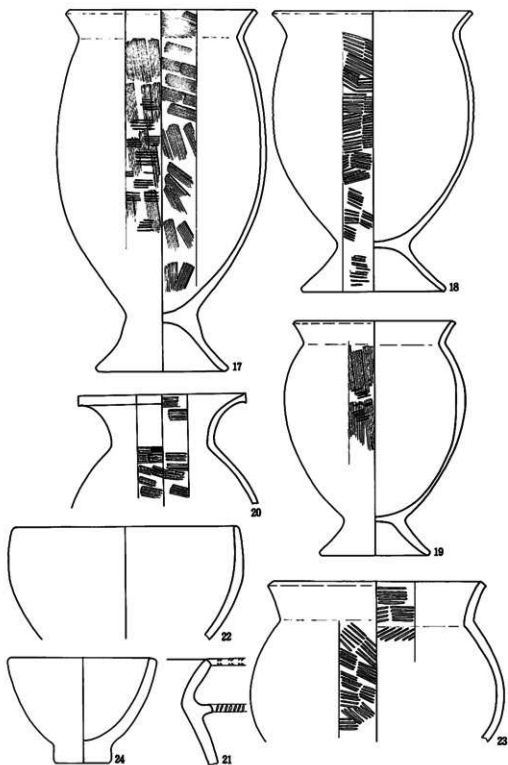


図17 4号住居跡出土の土器（17-21番=1/4、22・23番=2/5、24番=1/1）

線的に開く（高さ4.9cm）。甕の外表面はタタキ目のあとナデ調整して、さらにハケ目で軽く調整を行う。内面はナデのあとハケ目調整。ハケ目は、上部では横方向に丁寧に調整されているが、下部は左上方向に荒っぽく付いている。胎土は黒褐色で砂粒が多い。胴の外表面に煤が付いている。

脚台付甕（18番）：口径19.8cm、胴径20.0cm、高さ27.6cm、底径14.2cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部はやや膨らむ。脚は基部が大きくて（径7.0cm）、直線的に開いている（高さ4.2cm）、甕の外表面は横方向のタタキ目がはっきりみられる。内面はナデ調整。胎土は黒褐色で砂粒が多い。

脚台付甕（19番）：口径16.0cm、胴径17.9cm、高さ23.0cm、底径11.0cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部は膨らんでおり、ずんぐりとしている。胴の最大径付近の器壁が厚くなっている。脚は広くて低くなる（高さ3.3cm）。甕の外表面はタタキ目のあと、ナデ調整を行い、さらに縦方向のハケ目調整がみられる。内面はナデ調整。脚台の外表面はナデ調整。内面はハケ目のあとナデ調整。胎土は黒褐色で砂粒が多い。胴部の外表面に煤が付着している。

壺（20番）：口径16.4cm、現存高11.0cm、口縁部は大きく外反して、やや肥厚している。胴長になるらしい。外表面はタタキ目調整のあと、完全にナデ消してからハケ目調整を行う。内面は大きめのハケ目調整を横方向に行う。

壺（21番）：口径34.0cmの大形壺の口縁部破片と胴部破片が出土している。甕かもしれない。口縁はく字形に外反して、コ字形突帯が付く。口唇は2本単位の縞杉状の列点文、突帯には列点文が付く。胴部にもコ字形突帯がめぐる。外表面はタタキ目のあとハケ目調整を行う。

高坏（22番）：口径12.8cm、現存高7.6cm。口縁部の外表面に小さな段がみられるので坏部と思われる。外表面タタキ目のあとナデ消している。内面はナデ調整。内外両面共にベンガラを塗っている。

脚付鉢（23番）：口径17.6cm、現存高10.7cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部は（最大径16.7cm）は大きく膨らむ。底部は脚台が付いていたものと思われる。外表面はタタキ目調整が右下方向にみられる。内面は口縁部にだけタタキ目調整を行い、胴部はナデ調整する。胎土は黒褐色で砂粒多い。

小型鉢（24番）：口径5.0cm、高さ3.5cm。盃形の手捏土器。ナデ調整。

5. 6号住居跡（図18）

5号住居跡は西側の一部が発掘されたにすぎないので、床面からの遺物の出土はなかった。

6号住居跡の床面から壺（25番）、脚付鉢（26番）、鉢（27番）が出ている。

壺（25番）：口径20.8cm、現存高12.3cm。口縁部と頸部はやや角張って外反する。肩に断面三角形の突帯がめぐる。壺の外表面は、胴部にはタタキ目、口縁部にはハケ目調整を行っている。

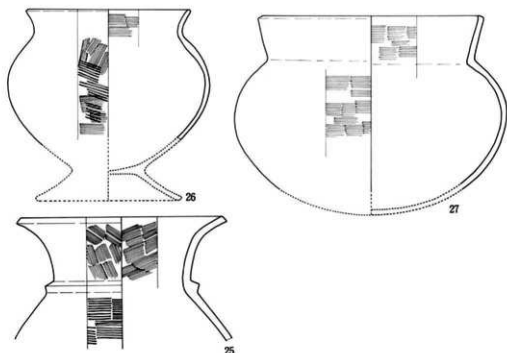


図18 6号住居跡出土の土器（25・26番=1/4、27番=2/5）

内面の場合、口縁部は右上方向のハケ目調整で、胴部はナデ調整。胎土は褐色で粒砂が多い。

脚付鉢（26番）：口径16.4cm、推定高18.8cm、胴径20.0cm。口縁部は軽く外反する。胴部は丸みをもって膨らむ。外面はタタキ目調整のあとハケ目調整をして、さらにナデ仕上っている。内面は口縁部にハケ目調整、胴部はナデ仕上げる。胴下半分に煤が付着している。胎土は黄褐色で砂粒多い。

鉢（27番）：口径25.0cm、推定高13.2cm、胴径16.1cm。口縁部は立ち上がり、胴部は大きく膨らむ。外面は胴部に横方向のハケ目調整が行われ、他はナデ仕上げ。内面は口縁部にハケ目調整、胴部はナデ仕上げ。胎土は灰褐色で砂質。胴下半分に煤が付着している。

6. 7号住居跡（図19）

7号住居跡床面の土器は小さな破片が少量であった。完型の土器は脚台付甕（28番）だけだった。

脚台付甕（28番）：口径19.9cm、高さ27.8cm、胴径19.7cm、底径14.3cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部は最大径がやや上位にあり、長胴になる。脚は大きくて、基部は広く（径7.2cm）、直線的に開いており、やや高い（高さ4.7cm）。甕の外面はタタキ目調整のあと軽くナデ仕上げを行い、さらにハケで部分的に調整する。内面はハケ目調整を行う。胎土は黒褐色で

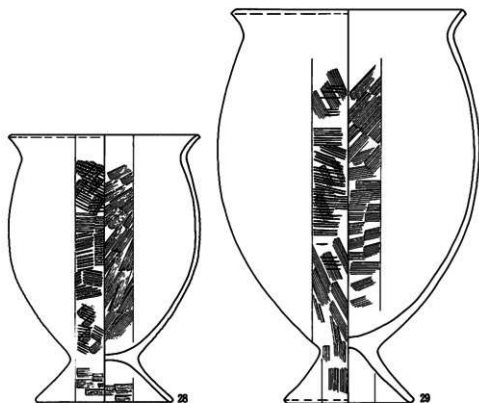


図19 7号(28番)・8号(29番)住居跡出土の土器 1/4

砂粒が多い。

7. 8号住居跡(図19・20)

8号住居跡の床面から、脚台付甕(29番)、壺(30・31・32番)、高坏(33・34番)、片口鉢(35番)が出土した。

脚台付甕(29番)：口径24.5cm、胴径27.0cm、高さ40.7cm、底径14.0cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部の最大径は中位にあり、長胴になる。脚台は基部が小さくなり(径6.0cm)、直線的に開く(高さ5.8cm)。外面はタタキ目調整のあとナデ仕上げを行い、さらに胴上部と下部にハケ目調整を行う。口縁部は横ナデ仕上げ。内面は、上部では右上方向、下部は横方向にハケ目調整する。胎土は黒褐色で砂粒多い。胴下半分に煤が付着している。

壺(30番)：口径19.2cm、胴径29.7cm、高さ41.5cm、底径7.0cm。比較的短い口縁が外反している。頸部が小さくなる(径14.5cm)。胴部の最大径は上位にあって、胴長になる。外面はタタキ目調整のあとハケ目調整で仕上げる。特に底部はハケ目によってタタキ目が完全に消えている。口縁部は縦方向にハケ目が付いている。肩にヘラ先による列点文が1列めぐり。内面

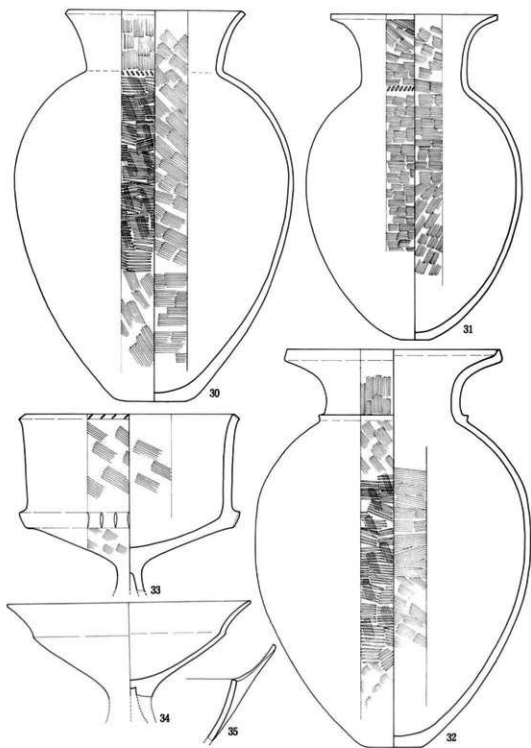


図20 8号住居跡出土の土器 (30・31・32・34=1/4、33・35=2/5)

はハケ目調整。口縁部から胴上半分は右下方向、底部付近は横方向にハケ目が付いている。胎土は褐色で砂粒が多い。

壺(31番)：口径18.0cm、胴径23.2cm、高さ34.8cm。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部が外反する。肩にヘラ先による列点文が1列めぐり、胴部の最大径は中位にあって長胴になる。底部は丸底に近い小さな平底になる。内外両面共に横方向のハケ目調整。底部付近は内外面共にナデ仕上げ。胎土は灰褐色で砂粒が多い。

壺(32番)：口径23.4cm、胴径27.6cm、高さ42.5cm、底径6.0cm。口縁部は大きく外反して、やや立ち上がる。肩に断面三角形の突帯がめぐり、胴部の最大径は中位にあって長胴になる。底は小さな平底。壺の外側はタタキ目調整のあとハケ目仕上げを行う。特に胴上部と底部付近はハケ目調整が強いのでタタキ目が消えている。内面は胴部中央にハケ目調整を行い、それより上部と下部ではナデ仕上げを行う。胎土は赤褐色で砂粒が多い。

高坏(33番)：口径16.0cm、現存高12.5cm。口縁部が垂直に立ち上がり、肩に突帯をめぐらした深い坏に小さな脚が付いている。脚の径は1.8cm。口唇と肩の突帯にヘラ先による列点文をめぐらす。内外両面に右下方向のハケ目を部分的に入れる。

高坏(34番)：口径26.0cm、現存高10.3cm。口縁部はゆるやかに外反する。肩は軽い段になる。坏は大きく開いて浅い。器面は内外両面共にヘラによって研磨されている。胎土は灰褐色で砂粒が多い。

片口鉢(35図)：口径17.6cm。片口部の口縁部の破片である。片口の部分だけ突き出している。内外両面共にハケ目が上方向についている。

8. 9号住居跡(図21)

9号住居跡の床面から脚台付甕(36番)、高坏(37番)、器台(38番)、小型鉢(39番)が出土している。

脚台付甕(36番)：口径19.0cm、胴径21.6cm、高さ40.5cm、底径14cm、脚台高8.5cm。口縁部は外反してく字形になる。胴部の最大径は比較的下位にあり、長胴。脚台が高い。甕の外側は横方向のタタキ目調整のあと上半分はハケ目調整、胴部の中位から底部はナデ仕上げを行っている。内面はナデ仕上げで、下部は右上方向にハケ目調整を行っている。脚台の内側はハケ目調整。胎土は黒褐色で砂粒が多い。煤が付着している。

高坏(37番)：口径40.0cm。口縁部の破片。編年にあたって重要なので図示した。口縁はゆるやかに外反する。外面はナデ仕上げで、内面はハケ目調整。胎土は褐色で砂粒が多い。

器台(38番)：上径11.0cm、下径13.8cm、高さ15.8cm。口唇に2本単位の沈線文。外面は下半分にタタキ目調整を、上半分はナデ仕上げ。内面は下部にハケ目調整、他はナデ仕上げ。内面上部は粘土をしぼったため棒を押しあてて調整している。

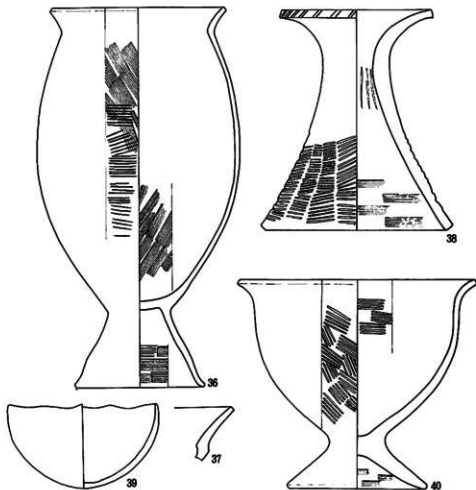


図21 9号住居跡(36—39番)と包含層出土(40番)の土器
(36番=1/4、37・38・40番=2/3、39番=1/1)

小形鉢(39番)：口径5.4cm、高さ3.0cm。手捏土器。口唇は水平にならない。

脚付鉢(40番)：Aトレンチの北側付近で耕作によって破壊された竪穴住居が1基あった(床面の一部と炉の一部が見つかった)。その住居付近からこの土器(40番)は出土した。口径17.2cm、高さ14.9cm。口縁部はゆるやかに外反する。全体的に開いている。脚は器壁が厚くて、低く開いている。外面はタタキ目調整が方向を多少ずらして付いている。脚はナデ仕上げ。内面は口縁だけハケ目調整だが、他はナデ仕上げ。胎土は黒褐色で砂粒が多い。

9. 土製品(図22)

1号住居跡西側の貯蔵穴の中から鉢(6番)と高坏(8番)と共に土製の勾玉(1番)と玉(2番)が出土した。

土製勾玉（1番）

：長さ3.9cm、頭部幅1.1cm、胴部幅1.4cm。J字頭に近い。直径2mmの細い孔が一方から開けられている。上位は太いが下位はやや角張って細くなっている。胎土は褐色で良質の粘土を使用しているが、焼き上がりがそれほど良くない。

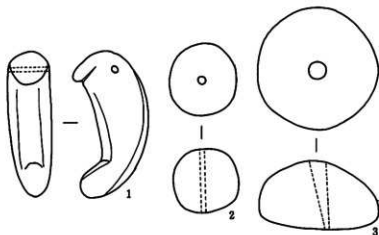


図22 土製の勾玉と玉（1号住居跡1・2、4号住居跡3） 1/1

土製玉（2番）：直径1.8cmの球形の土製玉であり、中央に直径2mmの孔が一方から開けられている。胎土は褐色で良質の粘土を使用しているものの、焼き上がりはそれほど良くない。

土製玉（3番）：4号住居跡の西側床面から土製玉が1個出土した。直径3.3cm、厚さ1.9cm。下面が平坦になって、上面は球形に膨らんでいる。上から下へ斜め方向に穿孔される（上端径4mm、下端径1mm）。胎土は黒褐色で、砂質の粘土を使用しており、焼き上がりはそれほど良くない。

10. 鉄製品（図23）

1号住居跡のベッド北側から鉈（1番）と鎌が重なって出土した。また4号住居跡の炉の東端から鉈（3番）が出土した。

鉈（1番）：長さ13.9cm、幅1.5cm、厚さ2mm。ほぼ完形。刃部先端がやや内反りになる。横断面形によれば刃部に向かってやや内反りになる。基部の幅はやや狭くなっている。

鉈（3番）：現存長4.7cm、幅1.0cm、厚さ1.5mm。上端の破片。刃部先端と基部は失われている。横断面形は刃部に向かってやや内反りになっている。1号住居跡出土の鉈（1番）に比べて小さめである。

鉄鎌（2番）：現存長2.8cm、幅2.8cm、厚さ2mm。基部を8mmほど折り返しており、形状的にみて手鎌の特徴がみられる。

11. 炭化物

8号住居跡の炉は焼灰が詰まっていた。その灰を分析してみたところ、炭化米が多数出土し

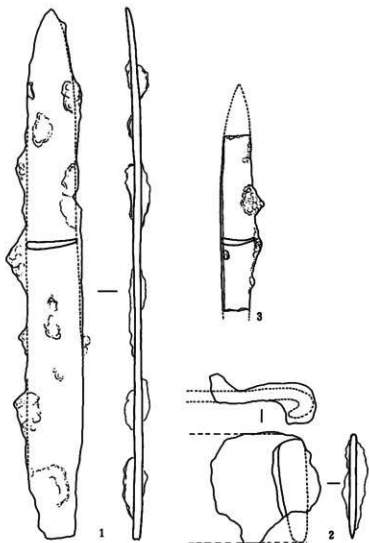


図23 鉄製品（鏃1・3、鎌2、1号住居跡1・2、4号住居跡3） 1/1

た。そのうち完全な形の炭化米は7粒であった。

試料を肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下で同定を行った。炭化米の大きさの測定は、できるだけイネの胚乳の形質を明瞭にとどめているもの（7個）を選別した。計測はノギスを用いて長さと幅を測定した。

炭化米試料は全てイネ（*Oryzasativa* L.）であり、胚乳のみで初はついていなかった。全体的に保存が悪く、火熱によって変形している。試料の炭化米は胚乳のみであったから精米されたものが焼けたものとみられる。

計測の結果、平均値は、長さ5.60mm、幅2.66mmであり、小型で単粒型という範疇に入るものが多い。古代米としては平均的な形状を示しているらしい。玉名郡倉（8世紀）出土の炭化米と比較してみると、長さはやや長く、幅はやや狭いようである。

炭化米計測値 (mm)

	粒 長	粒 幅	長／幅	長×幅	
	6.2	2.4	2.58	14.88	
	6.2	2.5	2.48	15.00	
	5.2	2.8	1.86	14.56	
	5.5	2.9	1.90	15.95	
	5.6	2.6	2.15	14.56	
	5.5	3.0	1.83	16.50	
	5.0	2.4	2.08	12.00	
$\bar{x}$	5.60	2.66	2.13	14.84	
u	0.46	0.24	0.46	1.45	
$\bar{y}$	4.97	2.78	1.80	13.85	玉名郡倉出土の炭化米
uy	0.37	0.27	0.21	1.74	
n	100	100	100	100	

12. 炭化材

1号住居跡と7号住居跡は火災によって建物が焼け落ちていた。建物の柱が比較的大きな破片となって出土した。1・7号住居跡の主柱と見られる計4本の柱材について樹種を検討した。

試料を乾燥させたのち、木口、柾目、板目の断面面を作製し双眼実体顕微鏡で観察した。4個の試料はいずれも「マツ属複維管束亜種の一つ *Pinus subgen. Diploxylon* sp. マツ科」であった。複維管束亜属（いわゆる二葉松類）にはアカマツとクロマツそれにリュウキュウマツの3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布する。マツ科は強度が高く加工も比較的容易であり、周辺地域で入手が容易であったことが、木材に使用した背景として考えられる。玉名郡倉関連の寺院・庁院・郡倉の建物群の木材も基本的にはマツが最も多く使用されていた。

13. 住居跡の土器（まとめ）

諏訪原遺跡住居跡群の床面から出土した土器について報告を行った。竪穴住居跡の床面から出土したとはいえ、土器形式の上からみて少しばかり編年的にズレているのではないかとみられる土器があるものの、同一床面から出土しているから、ほぼ同じ時（期）に使用されていたものとみられるので、一応共伴関係にあるとみている。

中村幸史郎氏は「方保田東原遺跡」において、弥生時代後期後葉から古墳時代初期に至る土器についてⅠ式からⅤ式まで5形式の分類と編年を試みている。そのうちⅢ式と呼ばれている

甕は脚台付甕であり、外面はタタキ目調整のあとナデ仕上げか、ハケ目調整を行っている。諏訪原遺跡住居跡出土のすべての甕は中村氏のⅢ式土器に分類できる。甕に共伴している壺・高坏・鉢などもⅢ式のそれと同じ形式であった。

中村氏はⅢ式土器のうち甕を、口縁部の外反の程度及び胴部の膨らみの程度と位置によって、ⅢA式とⅢB式に二分・編年した。諏訪原遺跡住居跡出土の甕もⅢA・ⅢB両形式に細分されるから、発掘された9基の住居跡は、大きく2つの時期（ⅢA期とⅢB期）に分かれるらしい。中村氏はⅢ式土器を庄内期より前の弥生時代後期末に編年しているから、諏訪原遺跡の住居跡群も弥生時代後期末に編年が考えられる。ただし竪穴住居床面出土の土器類の中には両土器が一緒になって出土している住居もある。土器の継続使用を考えると、個々の竪穴住居を、土器形式の上からⅢA期とⅢB期の2期に厳密に分けづらい面がある。

第Ⅳ章 足跡について

1. 足跡の発掘

諏訪原遺跡の調査によっての弥生時代後期末の9基の竪穴住居が発掘された。うち2基(5・6号竪穴住居)はその一部が発掘されたにすぎず、残り7基は竪穴内の床面を露出することができた。

竪穴住居の床面には黄褐色粘土を4～5cmの厚さに敷いて床張り(張り床)をしていた。粘土による床張りは、弥生後期のこの地方の竪穴住居ではしばしば観察されている。

竪穴住居の中には、建築材が燃えた炭化木と、屋根の灰が、多量に堆積していた。いずれの竪穴住居も火災に遭って焼失破棄されたい。

竪穴住居は地下を40～50cm程掘り下げて造られているから、梅雨時や長雨が続いた日など、季節や天候によって、床面がぬかるむ(泥濘)ことが多々あったようである。ここの住居跡のように床面が粘土張りされておれば、足跡がより明瞭に付き易い。長い年月の間、竪穴内で生活している訳であるから、以前に付いた足跡は、その後のぬかるみで踏み消されたり、その後の乾燥期に消耗(磨り減る)によって、消えたりしたことであろう。ここの住居跡は足跡が付いてから、それほど日数(時間)を置かないうちに建物が燃えてしまったらしい。そのため、焼失直前に粘土床に付いた足跡は表面に火熱を受けて、低温度ではあるが焼き締まっていた。しかも粘土は黄褐色であったし、足跡の凹の中には灰をはじめ黒褐色土が詰まっていたので、足跡の発見には、それほど手間はかからなかった。

竪穴住居の内部の発掘を進めながら、床面の硬い面まで達したところで、発掘器具も刷毛と筆に替えて、床面の上面を露出していった。その結果、床の上面の大きなうねりの中に、小さな凸凹が露出された。さらに床面を筆で掃いてみたところ黄褐色粘土(床張り)の中に黒褐色土が入り込んだ足跡の上面が露出されていった。足跡の内部は比較的軟らかだったので、腰の強い絵筆で露出することができた。

床面には弥生後期末の土器が張り付いていた。これらの土器は住居が営まれていた時に使用されていたものである。床面に張り付いている土器を取り除くとそこから足跡が見つかるので、足跡は竪穴住居が破棄される(焼失)直前に付いたことが分かる。

ヒトの足跡は各住居の床面にかなり多数確認されたが、以前に付いた足跡は新しい足跡によって踏み潰されていた。踏み潰された足跡を露出すると煩雑になって混乱するので、最後に付いた明瞭な形の足跡だけを露出することにした。足跡は計186個確認できた。これらは住居が焼失する直前に付いた足跡ばかりである。それ以前に付いていて、新しい足跡によって部分的に踏み潰された足跡は300～400個ほどにのぼる。

今回の発掘は弥生時代の墓群とその中から出土する人骨が狙いの発掘であった。筆者(坂

田)は発掘計画の段階から人類学の立場で参画していたから、本調査の初日から発掘に参加していた。いざ発掘を行ってみると弥生後期の竪穴住居ばかりが出土した。

現在ではずいぶん少なくなったが、昔の農家の土間は大きくうねっており、小さな凸凹があったて、よくみるとそれは下駄の歯の跡などであった。住居跡の発掘報告書を見つめると、その多くが、床面が機械的に平坦に削られている。農家の土間を想起するとき、竪穴住居の床面にも生活の痕跡が遺されているのではないかと常々考えていたが、発掘の機会が今日までなかった。諏訪原遺跡からは、幸か不幸か人骨が出土しなかったため、調査主任の益永主事に我が儘を許していただいて、人骨を露出する要領で竪穴内の床面の露出を行い、人類学の立場から床面を観察することができた。

諏訪原遺跡の全部(7基)の住居跡から足跡が発見された原因(理由)のうち、最も大きな要素は黄褐色粘土による床張りが行われていたことにより足跡が見分け易かったこと、また、建物が焼失した際に床面に熱を受けて、表面がやや焼けたことが保存を良くしたものとする。さらに発掘当初から人類学の立場で参加していたので床面の露出にあたって認識の差があったのかもしれない。以下、今日まで進めてきた足跡に関する研究成果について中間報告を行っておきたい。

2. 足跡の出土状況

(1) 1号住居跡の動物(図5、図版5)

1号住居跡は北側に入口が設けられていた。入口付近からベッド(東壁)に向かって粘土の床張りの保存が良かった。竪穴住居の南半分の床面は生活によって消耗(磨り減る)しており、粘土の床張りが剥がれていた。

入口付近からイヌ(犬)とブタ(豚)の足跡が見つかった。イヌの足跡は計8個見つかったが、足跡の大きさに少し差がみられるので2頭分と考えられる。足跡の大きさからみて小型犬らしい。小さめのイヌの足跡は4個あり、右足2個、左足2個。大きめのイヌの足跡は4個あり、右足3個、左足1個。

ブタの足跡は計5個見つかったが、足跡の大きさに少し差がみられるので2頭分と考えられる。小さめのブタの足跡は3個あり、右足1個、左足2個。大きめのブタの足跡は2個あり、左右1個ずつ。いずれも蹄の先端が丸みを帯びており、大きいので成獣ではないかと思われる。

イヌは縄文時代からヒトに飼われていた動物であるし、弥生時代の菅原遺跡のイヌはヒトによって食べられている。イヌはヒトにとって最も身近な動物の一つであったらしい。

ブタとイノシシをどうやって区別するのか問題である。ただこの遺跡の場合は、ヒトの住んでいる住居内にイヌと一緒に出入りしているものであるから、ブタと考えた方が自然ではないだ

ろうか。ブタは弥生時代の吉野ケ里遺跡などからその骨が報告されているので、イヌと共にヒトにとって身近な動物の一つであつたらしい。

(2) 1号住居跡のヒトの足跡(図5、図版4)

1号住居跡の東側の支柱付近からヒトの足跡が見つかった。ヒトの足跡は19個あった。足跡は大人が2人分、子供が3人分、計5人分であった。子供の足跡は奥の方のベッドに近い所にまとまっていたが、大人の足跡は入口の方から子供の方に向かって付いていた。足跡の中には、指の爪が破れ(割れ)たヒトがいる。また、指紋が確認された足跡もあった。

(3) 2号住居跡の足跡(図6、図版6)

2号住居跡は東側半分が発掘された。床面のほぼ前面からヒトの足跡が見つかった。床面は少し硬かったらしくて、足跡はやや浅いものの、しっかりと付いている。足跡は19個あった。足跡は大人が2人分、子供が4人分、計6人分であった。

(4) 3号住居跡の足跡(図7、図版7)

3号住居跡はヒトの足跡が出土した一帯だけに粘土の床張りが違っていた。その外の所は床の粘土が生活によって消耗(磨り減る)していたので、足跡は確認できなかった。

足跡は17個あった。足跡は大人が3人分、子供が3人分、計6人分であった。大人3名のうちの1名は両足とも変形しているようだ。大人3人の中には成長した子供が1人含まれているらしい。

(5) 4号住居跡の足跡(図8、図版8)

4号住居跡は、炉を中心として床面の大部分が生活によって、消耗してしまつてやや低くなつている。住居の北側と南壁に添つて粘土の床張りが違つていて、そこにヒトの足跡がみられた。南壁の中央には貯蔵穴とみられる穴があるので、そこへ歩いて来た人の足跡もある。

足跡は36個あった。足跡は大人が4人分、子供が6人分、計10人分であった。子供の中に足幅が狭くて第5指が後退した特徴的な足の持ち主がいる。大人4人の中には老人2人が含まれているらしい。

(6) 7号住居跡の足跡(図10、図版9)

7号住居跡は1度建て替えが行われている。その際、床の一部が補修されて新しい粘土張りが行われている。足跡は新旧両床面から見つかっている。7号住居の場合は、粘土の床張りがほぼ全面保存されていたが、足跡は限られていた。7号住居は部分的にぬかるんでいたとも考えられるが、焼失直前のヒトの行動を示しているようにも見て取れる。貯蔵穴とみられる大穴

の周囲と炉の所に足跡がまともについている。新旧両方の床面に同一人物とみられる足跡があった。足跡は18個あった。足跡は大人が2人分、子供が4人分、計6人分であった。

(7) 8号住居跡の足跡(図11、図版10・11・12)

8号住居跡の北西角付近と南東角付近の床面は生活によって消耗しているため、足跡は見つからなかった。炉を中心に対角線上の一带に粘土の床張りが遺っていて、そこから足跡が見つかった。足跡が多数なので、各人の住居内での行動が少しは明らかにできるかもしれない。

足跡は63個あった。足跡は大人が5人分、子供が4人分、計9人分であった。うち1名は両足とも変形しているようだ。大人5人の中には成長した子供が1人含まれているらしい。

(8) 9号住居跡の足跡(図12、図版13)

9号住居跡は南側半分が発掘された。足跡は床面全面から見つかった。炉と貯蔵穴のあいだを東西方向に歩いている。

足跡は14個あった。足跡は大人が3人分、子供が2人分、計5人分であった。大人3人の中に老人1人含まれているらしい。

(9) 足型

足跡は石膏によって型取りを行った。足跡に直接石膏を流し込むと、取り上げのとき、粘土が石膏に付着してしまっており、足跡が壊れてしまうので、型取りの前に足跡の表面を固定しておく必要がある。

文化財環境整備研究所(熊本市)に依頼して、足跡とその周辺を固めるための化学処理を行ってもらった。固定にあたっては、まずアイセラハード510(主成分ケイ酸リチウム)を噴霧した後、シリコンゴム浸水剤を噴霧して、土の表面を固定した。さらに石膏を流し込む直前に石鹼水を塗布した。その結果、足跡を壊すことなく、石膏による型取りができた。石膏の型取りは筆者が行った。

8号住居跡からは足跡が多数見つかった。いずれ博物館で8号住居が復元されることになるかもしれないので、堅穴全体の型取りを行うことになった。この作業は上記の研究所に委託した。8号住居跡の全面に発泡断熱充填剤(発泡ウレタン)をガンタイプノズルを使用して直接塗布して型取りを行った。

住居跡の床面(特に足跡一帯)を化学処理によって固定することができたので、その上を山砂(花崗岩の風化砂)で厚さ20cm程度覆って埋め戻した。なお保存処理に尽力くださいました丸山武水氏をはじめとする文化財環境整備研究所の方々に謝意を表します。

3. 竪穴住居の人口

(1) 足跡の判定

諏訪原遺跡の竪穴住居の床面にヒトの足跡が遺されていた。足跡は住居が火災に遭って焼失する直前に付いたものであろう。数日前の足跡はその後の足跡によって踏み潰されいる（踏み消されている）。床面を露出していると、そのような足跡の凸凹が多数（300～400個）確認された。完全かそれに近い足跡の多くは、いわば最後の足跡であるだろうから、それだけを露出するように心がけた。

足跡であるから、どこまで個人が特定できるか問題もある。ただし、一つの竪穴住居内において、足底の形の特徴と大きさがほぼ一致すれば、同一人物とみなして差し支えないと考えられる。足形は個人差が大きくて、個人鑑別は予想していたほど困難ではなかった。

来訪者の足跡については、家族の足跡と区別する方法がない。したがって、足跡の中には来訪者がいるかもしれないが、全員を家族として扱わざるをえない。

変形した足跡は、本人の足そのものが変形していたためそのような足跡になった場合と、足跡が踏まれたりして変形してしまったとも考えられる。同一人物とみられる変形した足跡が複数見つければ、それは本人の足に障害があったといえるのではなかろうか。変化のみられる足が数人分ある。なお足は母指が内反、小指が外反、足幅が広がっていて、裸足で生活する人々に特徴的な足型になっているから、日常彼等は裸足で暮らしていたらしい。魏志倭人伝によれば、倭人は〔皆徒跣〕とあるから、やはりそうであったらしい。

ヒトの足は成長にともなって大きくなっていくが青年期を過ぎると成長が平衡になる。足跡が大きいからといってすべて成人に入るとは限らないが、小さい足跡は子供である。ここでは、大きめの足跡は大人、小さめの足跡は子供（小人）として、足跡を2大別している。したがって大人に入れている足跡の中には青年期の子供（親子関係の子供）も含まれている。

足跡の個人鑑別・性別・年齢・計測値等々については、なるべく早い機会に研究結果をまとめたいと思っている。ここではその中間報告にとどめたい。

(2) 家族人口

一つの竪穴住居内の床面に残された足跡を一家族と仮定した場合、家族人口は表のとおりである。家族人口が最も少ないところは5人であった（1・9号住居跡）。最も多い家族は10人（4号住居跡）であった。7家族の人口の合計が47人であるから、一家族の平均人口は6.71人（約7人、誤差±0.75人）になっている。

大人対子供は21:26であり、子供の方が多い。大人に分類している足跡の中には、青年期のいわゆる子供が含まれているから、子供の数は26人よりさらに数名増えるらしい。

竪穴住居番号	人口（大人：子供）	竪穴住居の面積 m^2	一人平均の床面積 m^2
1	5人（2：3）	33.80	6.76
2	6人（2：4）	18.00（推定）	3.00
3	6人（3：3）	12.66	2.11
4	10人（4：6）	14.51	1.45
7	6人（2：4）	31.25	5.21
8	9人（5：4）	22.87	5.24
9	5人（3：2）	15.00（推定）	3.00
（計） 7基	47人（21：26）	148.09 m^2	
平均	$\bar{x}=6.71$ 人 $u=1.98$	$\bar{y}=21.16m^2$ $u=8.45$	

竪穴住居の床面積の計算は、1mm方眼紙を平面測量図（1/20）の上に被せて、方眼の目を数えた。計算によって出された平面積（ cm^2 ：単位）の値の十の位を四捨五入した。

竪穴住居の中で、最も小さいのは15.00 m^2 （9号住居跡）。最も大きな竪穴住居は33.80 m^2 （1号住居跡）。7基を合計した床面積は148.09 m^2 であるから、一つの竪穴住居の平面積の平均は21.16 m^2 になる。7家族47人が7基の合計床面積148.09 m^2 に住んでいるから、1人分の床面積は3.15 m^2 （148.09 m^2 ÷47人）になる。

家族人口について岡野 克氏（1938年「埼玉県福岡村縄文前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』53-8号 365-382頁）は、1人当たりの住居面積を3 m^2 とされた。岡野氏は竪穴平面積（A）と家族人口（n）との関係については $A = 3(n+1)$ $n \geq 2$ という関係式を導き出している。

小山修三氏（1984年『縄文時代』中央公論社）は、船田遺跡をもとに、1人当たりの住居面積を3.3 m^2 と推定している。

総山貝塚の場合、12.2 m^2 の竪穴住居の中から5体の人骨が出土しているから、1人当たりの住居面積は2.44 m^2 になる。

（3）床面積と人口

諏訪原遺跡の場合、一家族の構成人員は5名から10名まであってまちまちであった。一方、家族の構成員が多ければ、大きな竪穴住居に住んでいるのかといえば、そうでもなかった。1人当たりの床面積は、最小が1.45 m^2 （4号住居跡）で、最大は6.76（1号住居跡）だった。最小と最大の差は約5倍もある一人平均の床面積は3.15 m^2 （148.09 m^2 ÷47人）である。

竪穴住居によっては三世代が一緒に暮らしている家族もいるし、親子だけの家族もある。家族構成員数は家によって差があるのが当然と思われる。家族人口と竪穴住居の床面積との相関係数を求めたところ、 $r = -0.28$ であった。これは、両者間に相関関係がまったくないことを

示している。つまり、家族人口と竪穴住居の床面積との間にはなんら関係はないといえる。

諏訪原遺跡の場合、1人当たりの床面積の平均は $3.15m^2$ であった。関野氏は $3.0m^2$ 、小山氏は $3.3m^2$ と推定されており、ほぼ似た値になっている。それでは、

$$\text{竪穴住居の床面積} \div 3.15m^2 = \text{家族人口}(n)$$

になるかといえば、そうはならない。なぜならば、家族人口と床面積の間にはなんら相関関係が認められないからである。1人当たりの床面積 $3.15m^2$ は、あくまでも平均値であって、一家族人口の推定にあたって基準値にはなりえない。

個々の竪穴住居からその家族人口を推定することはできないけれども、住居がある程度のまとまっておれば、総人口の推定は可能である。例えば、ある集落の竪穴住居群の床面積の合計が $315m^2$ であった場合、その集落の人口は100人程度と推定される。

$$\text{総床面積} 315m^2 \div 1人 3.15m^2 = 100人$$

諏訪原遺跡は熊本県にある弥生後期末の竪穴住居であるから、上記の集落人口の推定式がそのまま縄文時代や、他の地域の竪穴住居にも適用できるかどうか、これから類例を待って検討されなければならない。

附 前原長溝甕棺群

1. 調査経過

昨年度（1994年夏）、大字原口字雀迫704番地において前原長溝甕棺群の発掘調査を行った。発掘の結果、直径約25m、高さ（推定）2.0～2.5m、環壕をめぐる自然墳丘墓の中から21基の甕棺が出土した。この地は大字前原字長溝には含まれないけれども、遺跡台帳に「前原長溝」の遺跡名が冠してあるので、混乱を避けるため、そうように呼称している。

高木先生は昭和47年に甕棺1基と土墳墓1基を発掘された。その時出土した甕棺（高木1号甕棺）は現在、町立歴史資料館にて展示保管されている（図版16）。高木先生によれば、甕棺の出土地は字雀迫726-1番地とのことであったから、昨年発掘を行った前原長溝甕棺群が723～726番地の方面に拡がりをもっているのではないかと考え、今回の発掘が計画された。甕棺予定地を発掘したところ、昭和48年に発掘された甕棺の土墳はもちろん、甕棺の破片すら出土しなくて、替りに弥生後期の住居跡が見つかった。住居跡の発掘が一段落した頃、高木先生から甕棺の出土地点は字辻723番地であったと訂正・御教示いただいた。そこで、723番地の甕棺群の発掘に入った。

甕棺群が出土した字辻723番地は住居跡が出土した字雀迫724番地とは里道を境にして東と西に位置している。甕棺群は昨年発掘した前原長溝甕棺群（字雀迫704番地）と一連のものであるから、遺跡名を「前原長溝甕棺群」とした。

遺跡付近に標高39.60mの基準点があったので、レベルはすべて標高で示している。昨年度（1994年）発掘を行った墳丘墓の調査報告書（益永浩仁1994年『前原長溝甕棺群』菊水町教育委員会刊）においてもレベルは標高で示している。ところが、昨年度は、標準点の標高（39.60m）を19.60mと見誤ったため、-20.00m低くなってしまった。上記の報告書中のレベルはすべて+20.00mを追加してほしい。お詫びと訂正をいたします。

2. 甕棺の調査

（1）甕棺の分布（図24、図版14）

大字原口字辻723番地を発掘したところ10基の甕棺が出土した、さらに甕棺群のほぼ中央付近から昭和47年に高木先生が発掘された高木1号甕棺と土墳墓の掘り込みが見つかった。10基の甕棺群はそれだけで小グループを形成しているらしくて、広がりを見せない。甕棺群を囲むような壕又は溝のような遺構は見られない。なお甕棺測量図のレベルは、すべて43.30m（標高）である。

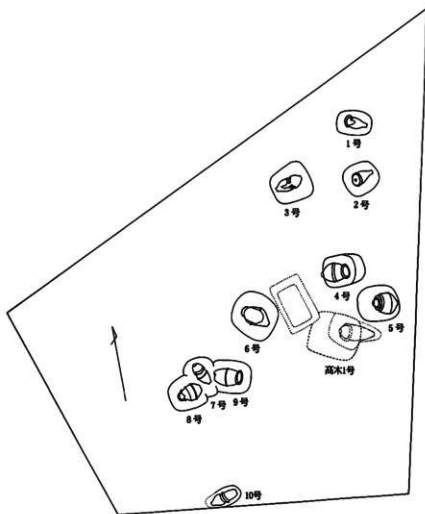


図24 墓棺の分布 1/150

(2) 1号墓棺 (図25、図版14)

土葬は、長軸115cm・短軸84cm・深さ53cm、東西に長い楕円形になっている。単棺。墓棺の主軸はN-82度-W、西向きである。傾斜角度は40度。墓は口縁部が半分ほど耕作によって失われている。小型の墓であるから小児用であろう。

(3) 2号墓棺 (図25、図版14)

土葬は、長軸106cm・短軸87cm・深さ40cm、東西に長い隅丸方形になっている。合口式複棺。墓棺の主軸はN-108度-W、西向きである。蓋には高坏の坏の部分を使用している。下墓は小型であるから小児用である。墓棺の傾斜角度は41度。合口の箇所を粘土で見張りしている。

(4) 3号墓棺 (図25、図版14)

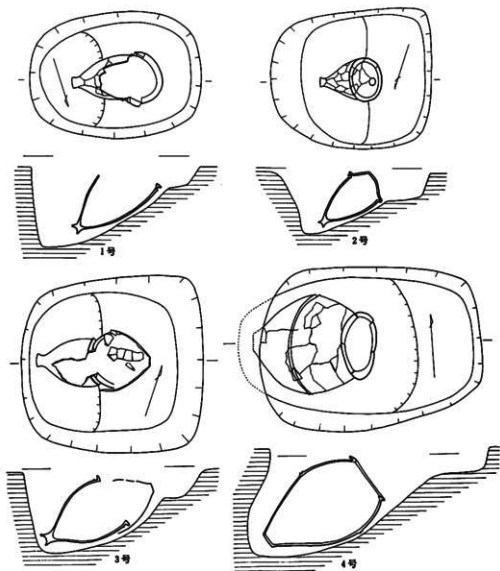


图25 墓棺测量图

1/25

土墳は、長軸122cm・短軸117cm・深さ57cm、東西に長い隅丸方形になっている。覆口式複棺。主軸はN-70度-E、東向きである。傾斜角度は28度。上甕は口縁を打ち欠いて下甕に覆せている。下甕は小型であるから小児用であろう。接合部を粘土で目張りしている。

(5) 4号甕棺 (図25、図版15)

土墳は、長軸147cm・短軸110cm・深さ72cm、東西に長い隅丸長方形。土墳の中央部付近をさらに掘り下げて傾斜をつけ、底部付近は側壁を掘り込んでいる。この遺跡の甕棺群の土墳に共通した特徴といえる。単棺。主軸はN-92度-E、東向きである。傾斜角度は28度。大型甕棺である。口縁部付近に粘土が付着しているので板蓋かもしれない。

(6) 5号甕棺 (図26、図版15)

土墳は、長軸147cm・短軸147cm・深さ80cm、隅丸方形。土墳の中央をさらに傾斜をつけて掘り下げて、そこに甕をあてがう。合口式複棺。主軸はN-92度-W、西向きになる。傾斜角度は40度。上甕は小さい甕で、下甕の口縁と接合している。粘土によって目張りされている。下甕は大型の甕であるから成人用であろう。

(7) 6号甕棺 (図26、図版15)

土墳は、長軸157cm・短軸143cm・深さ53cm、東西に長い隅丸方形。甕の上半分が耕作によって削られているから、現在は単棺であるが、元は複棺だったかもしれない。粘土の目張りがみられる。主軸はN-62度-W、西向きである。傾斜角度は38度。大型の甕であるから成人用であろう。

(8) 7号甕棺 (図26、図版15)

7・8・9号甕棺は接近して埋められた成人用甕棺である。土墳の切り合い関係によれば、9→7→8号の順になる。これは土器の形式変化と対応している。

7号甕棺の土墳は、長軸137cm・短軸110cm・深さ64cm、南北に長い隅丸方形。主軸はN-35度-W、北向き。傾斜角度は50度。覆口式複棺。上甕は口縁部を欠いて下甕にすっぽり覆せる。下甕との間を粘土で目張りする。

(9) 8号甕棺 (図26、図版16)

土墳は、長軸140cm・短軸122cm・深さ55cm、東西に長い隅丸方形。他の甕棺と同様、中央部より半分を掘り下げてそこに甕を入れている。主軸はN-113度-W、西向きである。傾斜角度は30度。合口式複棺。2号甕棺同様、上蓋は高坏の坏部である。脚の部分は折り取っている。接合部は粘土で目張りしている。

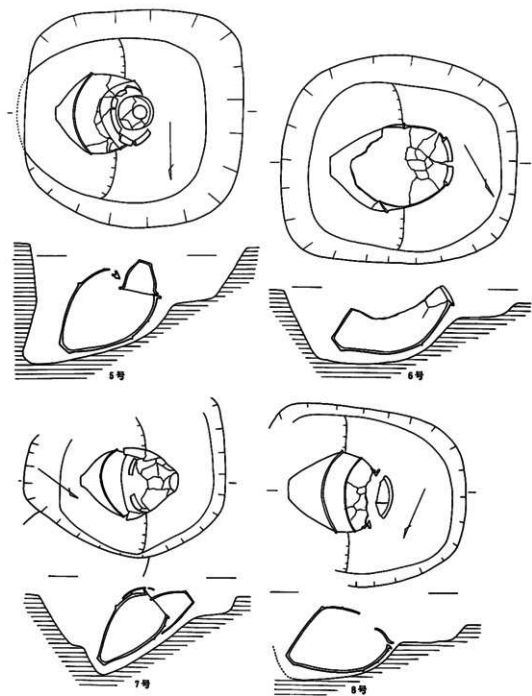


图26 瓷棺测量图

1/25

(10) 9号甕棺 (図27、図版16)

土坑は、長軸130cm・短軸108cm・深さ45cm、東西に長い隅丸方形。主軸はN-95度-E、東向きである。傾斜角度31度。単棺。口縁部に粘土の目張りがみられるので板蓋であろうか。底部付近は7号甕棺の土坑によって少し動かされている。

(11) 10号甕棺 (図27、図版16)

土坑は、長軸108cm・短軸84cm・深さ46cm、東西に長い楕円形。主軸はN-64度-E、東向

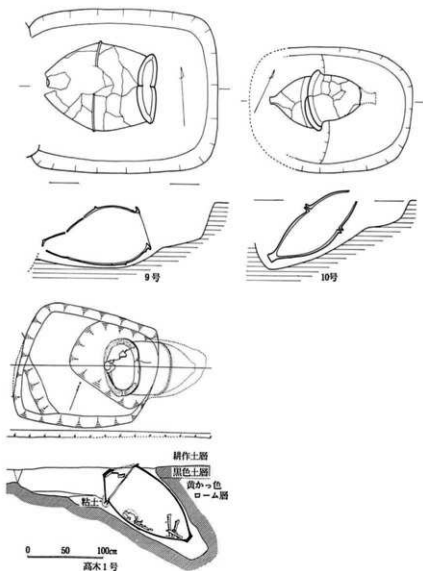


図27 甕棺測量図

1/25

きである。傾斜角度は25度。合口式複棺。小型の甕棺であるから小児用であろう。接合部は粘土で目張りされている。

(12) 高木1号甕棺 (図27、図版16)

甕棺群のほぼ中央部から昭和47年に高木先生によって発掘された高木1号甕棺(仮称)の土壌が確認された。図27の実測図は高木先生によって作製された原図のコピーを掲載させていた。図版16は復元された甕棺である。高木正文先生が昭和47年に発表された資料によって(『肥後考古学会』資料)概略を記す。土壌は長軸190cm・短軸150cm・深さ40cm、東西に長い隅丸長方形。主軸はN-110度-E、西向き。傾斜角度は39度。甕棺内から成人男性骨が1体出土。推定身長160cm程度。高木1号甕棺がまず最初に埋葬され、これを中心として、その周囲に追葬されていったらしい。

3. 甕棺

(1) 1号甕棺 (図28、図版17) [単棺]

口径33.0cm、高さ52.0cm、底径8.5cm。口唇は僅かに窪み、口縁の真下に断面三角形の凸帯が1本めぐる。口縁の内側はやや突き出る。胴部はそれほど膨らまない。底部は低くて、上げ底になる。外面の上部は横方向のハケ目、下部は縦方向のハケ目がみられる。外側は薄く丹塗りをしたあとで薄く黒塗りしている。この土器は黒変式土器に分類される。前原長湊甕棺群第Ⅳ期に編年を考えている。

(2) 2号甕棺 (図28、図版17) [合口式複棺]

上蓋：2号甕棺の上蓋は高坏の坏部を使用している。口径28.0cm、現存高7.8cm。口縁部は内には小さく、外に大きく出ている。浅い坏になる。ヘラ仕上げのあとで丹塗りしている。埋葬にあたって脚部を欠いたらしい。中期後半のⅤ期に編年される。

下甕：口径26.2cm、高さ37.3cm、底径7.0cm。口縁はやや外反り気味に外に張り出している。口縁下に沈線が1本とおる。胴部はほとんど膨らまない。上げ底になる。外面のハケ目は、上部では横方向、下部は縦方向に付く。この甕の口縁部は中期前半のように厚みが薄い。Ⅴ期に編年される。

(3) 3号甕棺 (図28、図版17) [複口式複棺]

上蓋：大型甕の底部付近を上蓋に使用している。現存高39.4cm。外面はハケ目調整のあと、薄く黒塗りしている。

下甕：口径37.7cm、高さ53.9cm、底径7.8cm。口縁はやや傾斜して、内側に突き出る。口縁下に断面三角形の凸帯が1本めぐる。胴部は膨らまない。上げ底になる。外面はハケ目調整、上

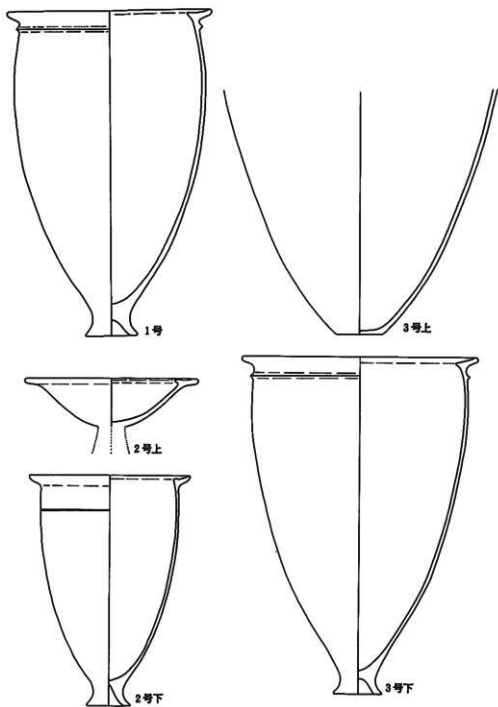


图28 亮棺夹测图 1/6

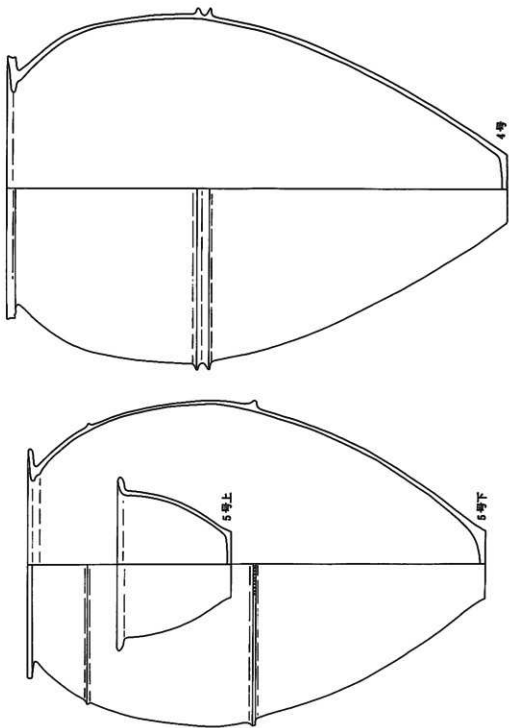


图29 变棺夹测图

1/8

部は横方向、下部は縦方向に付く。上半部は黒塗りされている。口縁部の形は2号のそれより古式であるからⅣ期に編年されそうである。

(4) 4号甕棺(図29、図版17) [単棺]

口径42.0cm、高さ90.4cm、底径10.8cm。口縁は内にやや傾斜しておりT字形になっている。肩が膨らみ最大径(58.0cm)の位置に断面三角形の凸帯が2本めぐり、下半分は直線的に小さくなる。ヘラ仕上げ。凸帯より上部が薄く黒塗りされている。焼成は硬質で、黄褐色になる。Ⅳ期に編年されるだろう。

(5) 5号甕棺(図29、図版17) [合口式複棺]

上蓋：口径28.1cm、高さ18.2cm、底径10.3cm。口縁部が直角に近く外反する。底部が大きい。外面は縦方向にハケ目調整を行う。

下蓋：口径37.3cm、高さ73.4cm、底径10.8cm、胴部最大径52.7cm。口縁部は逆L字形になっており、内側にはそれほど出ない。口縁はそれほど傾斜していない。胴部は膨らむが、やや長胴になる。口縁下に断面三角形の凸帯が1本めぐり、胴部最大径より少し下に断面コ字形の凸帯が1本めぐり、刻目が付く。ヘラ仕上げ。口縁が逆L字形になるのでⅤ期に編年すべきだが、それほど内傾していないのでⅤ期の中でも古い方だろう。

(6) 6号甕棺(図30、図版18)

口径44.5cm、高さ80.7cm、底径12.6cm、胴径56.0cm。口縁はT字形になるものの、大きく内傾しており、胴長で、しかもコ字形凸帯が1本めぐっている。凸帯には刻目が付く。ハケ目仕上げ。口縁外面は丹塗りされている。6号甕棺は、Ⅴ期に編年され、甕棺群の中で最も新しいとみられる。

(7) 7号甕棺(図30、図版18) [覆口式複棺]

上甕：大型甕の底部付近。現存高39.7cm。ヘラ仕上げ。

下甕：口径34.2cm、高さ56.0cm、底径9.1cm、胴径43.2cm。土壌の切り合い関係から、9→7→8号の順に変遷することが分かっているが、土器の形式からも同じように編年される。口縁はT字形に近く、やや内傾する。胴部は膨らみ胴長になる。口縁下に断面三角形の凸帯と、胴部最大径付近にコ字形凸帯が1本めぐり、突帯に刻目が付く。ハケ目調整。胴部凸帯より上が丹塗りされる。この甕はⅣ期の中でも新しい方であろう。

(8) 8号甕棺(図31、図版18) [合口式複棺]

上蓋：口径30.2cm、現存高11.1cm。高坏の坏部。口縁は鑷形になる。坏部は膨らんでおり、

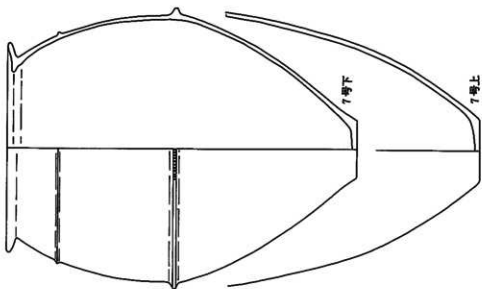
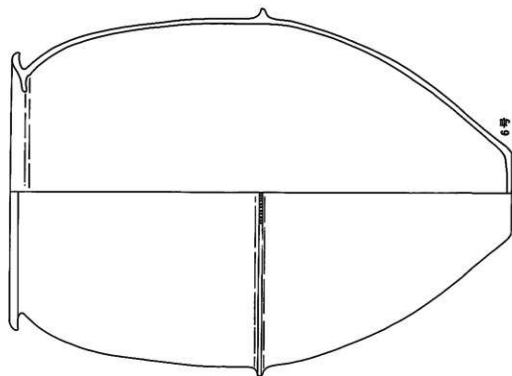


图30 变棺实测图 1/8

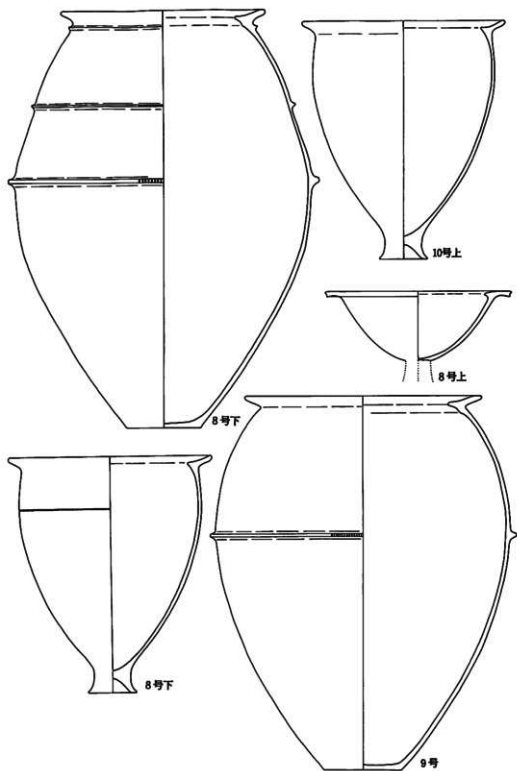


图31 甕棺実測図 1/6

やや深い。上蓋への使用のため脚を欠いている。丹塗り研磨。Ⅴ期に編年されるだろう。

下甕：口径33.3cm、高さ67.0cm、底径11.8cm、同形48.4cm。口縁は内側への突出はそれほどでもない。口縁が内傾する。口縁下に断面三角形の凸帯が1本めぐる。胴上部（断面三角）と胴部最大径（コ字形凸帯）が1本ずつめぐる。凸帯に刻目が付く。胴長になる。ヘラ仕上げ。胴長部凸帯より上が黒塗りされる。Ⅳ期に編年される。

(9) 9号甕棺（図31、図版18）〔単棺〕

口径37.8cm、高さ60.4cm、底径12.5cm、胴径47.3cm。口縁は内側よりも外の方に大きく出ている。口縁が内傾する。肩が膨らむ。胴部最大径付近に断面コ字形の凸帯が1本めぐる。凸帯に刻目を付ける。ハケ目調整。形式的にみて、9→7→8号の順に変遷するから、Ⅳ期の甕棺はそうように変遷・編年が考えられる。

(10) 10号甕棺（図31、図版18）〔合口式複棺〕

上甕：口径32.5cm、高さ38.0cm、底径7.7cm。口縁はく字形に近く外反する。胴部はほとんど膨らまない。底は脚台様に上げ底になる。右上方向にハケ目調整。

下甕：口径32.9cm、高さ37.8cm、底径8.1cm。口縁部が強く外反する。口縁下に沈線が1本横走する。外面は右下方向のハケ目調整。内面は上下方向のハケ目調整。10号甕棺は2号甕と同様、Ⅴ期に編年を考えている。

(11) 高木1号甕棺（図版16）〔合口式複棺〕

上甕：T字形口縁の鉢形。口縁が外傾する。口径61.4cm、高さ27.2cm。

下甕：T字形口縁。口縁が外傾する。胴部は膨らまない。胴の下位に断面三角形の突帯が2本めぐる。口径74.9cm、高さ115.1cm。この甕は本遺跡の甕棺群の中で最も古くて、Ⅲ期に編年されるであろう。

4. 甕棺の編年

(1) 墳丘墓甕棺群の編年

1994年度、大字原口字雀迫704番地において墳丘墓が発掘され、21基の甕棺が出土した。遺跡名は「前原長清甕棺群」。1994年に発刊された報告書（益永浩仁1994年『前原長清甕棺群』菊水町教育委員会）において、21基の甕棺についてⅠ期からⅣ期まで4つの時期に編年できた。Ⅰ期は中期初頭（前葉）の城の越式土器併行、Ⅱ期は中期中葉の汲田式土器併行、Ⅲ期は中期後半初めの須玖式土器併行に編年された。甕棺群の中心はⅡ期（橋口氏編年のKⅡb・c式）であった。

今回の発掘(1995年)では、字辻723番地において中期の甕棺が10基発掘され、以前出土した1例を加えて11基の甕棺群であった。前回と同じく、「前原長溝甕棺群」と命名された。

(2) 甕棺群の編年

今回の発掘では、中期後半(橋口氏編年のKⅢ式の甕棺ばかりであったから、前回の編年にさらに追加する形となった。

昨年度と今年度の甕棺を整理した結果、前原長溝Ⅰ期から同Ⅴ期まで5つの時期に細分編年することができた。いずれも弥生時代中期のうちである。編年の新旧対照表は次のようである。

甕棺の編年			
	前原長溝 1995	前原長溝 1994	橋口編年
中 (前半)	Ⅰ期	Ⅰ期	KⅡa式(城の越式)
	Ⅱ期 }	Ⅱ期 }	KⅡb式 KⅡc式(汲田式)
期 (後半)	Ⅲ期 Ⅳ期 Ⅴ期	Ⅲ期 Ⅳ期 ↙	KⅢa式(須玖式) KⅢb式 KⅢc式 } (立岩式)

昨年(1994)の編年と違っている所は、昨年Ⅳ期に編年した11号甕棺は、今回の編年ではⅤ期に変更されている。したがって昨年度、墳丘墓からはⅣ期の甕棺は出土していないことになる。

今回(1995年)発掘された11基の甕棺は、弥生中期後半、橋口氏編年によればKⅢa・b・c式に編年されるものであり、前原長溝Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期にあたる。

(3) 前原長溝甕棺群の編年

前原長溝Ⅲ期に編年される甕棺は、昭和47年高木先生によって発掘された高木1号甕棺であろう。

前原長溝Ⅳ期に編年される甕棺は、1号・3号・4号・7号・8号・9号甕棺である。Ⅳ期に甕棺の中心がある。

前原長溝Ⅴ期に編年される甕棺は、2号・5号・6号・10号甕棺である。

昨年度発掘された墳丘墓の甕棺群は弥生中期前半(Ⅰ・Ⅱ期)に主体があつて、Ⅲ期まで継続した後、埋葬が行われなくなる。

今回発掘された甕棺群は、Ⅲ期に始まってⅣ期に最盛期を迎え、Ⅴ期をもって墓地在営まれなくなる。つまり前原長溝甕棺群は墳丘墓の後を受ける形で墓地在継続されている。

参 考 文 献

- 緒方勉（他）1971年『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報、福岡熊本線（南関～植木）』
熊本県九州縦貫自動車道関係文化財調査団
- 中村幸史郎 1987年『方保田東原遺跡』山鹿市教育委員会
- 橋口 達也 1979年『Ⅳ考察』『福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査』九州縦貫自動車関係埋蔵
文化財調査報告XXXI中巻 福岡県教育委員会 121-203頁
- 西建 一郎 1983年『黒変式土器の基礎的研究』『古文化談叢』第12集 77-103頁
- 高木 正文 1979年『鹿本地方の弥生後期土器』『古文化談叢』第6集
- 坂田 邦洋 1993年『考古学統計』杉山書店（東京）
- 坂田 邦洋 1996年『比較人類学』青山社（東京）
- 石橋 新次 1983年『中九州における古式土師器』『古文化談叢』第12集 105-143頁
- 池田 通也 1982年『諏訪原』菊水町文化財調査報告第4集
- 益永 浩仁 1994年『前原長溝甕棺群』菊水町教育委員会

图 版



7・1・2・5号



1号

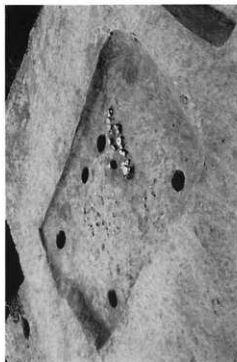


2号



7号

図版1 住居跡



3号



4号



8号



9号

图版 2 住居跡



1号



1号



2号



2号



3号



8号



8号



8号

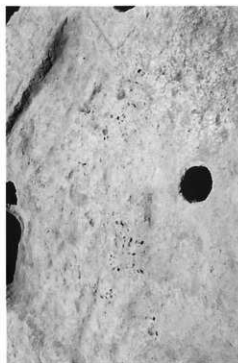


9号

図版3 住居跡床面の土器出土状況



図版 4 1号住居跡内の足跡



跡足のタブとヌイ



跡足のタブとヌイ

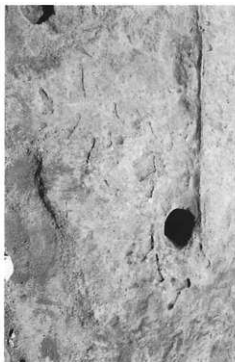


イス

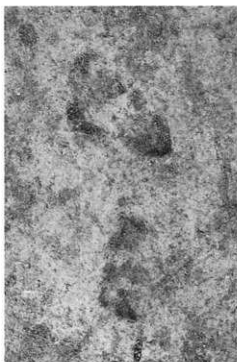


ブタ

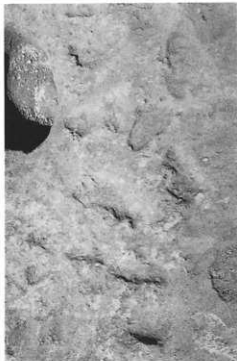
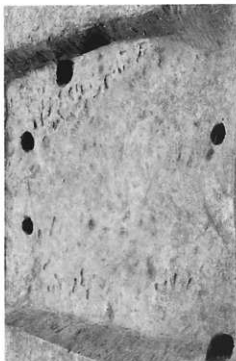
図版 5 1号住居跡内のイスとブタの足跡



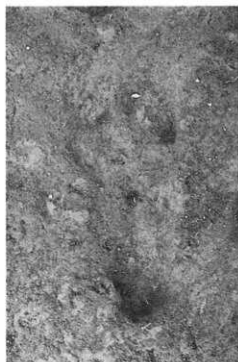
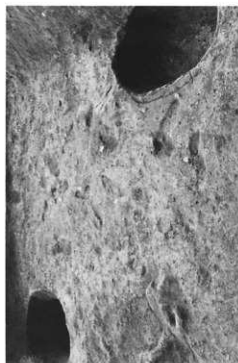
図版6 2号住居跡内の足跡



図版 7 3号住居跡内の足跡



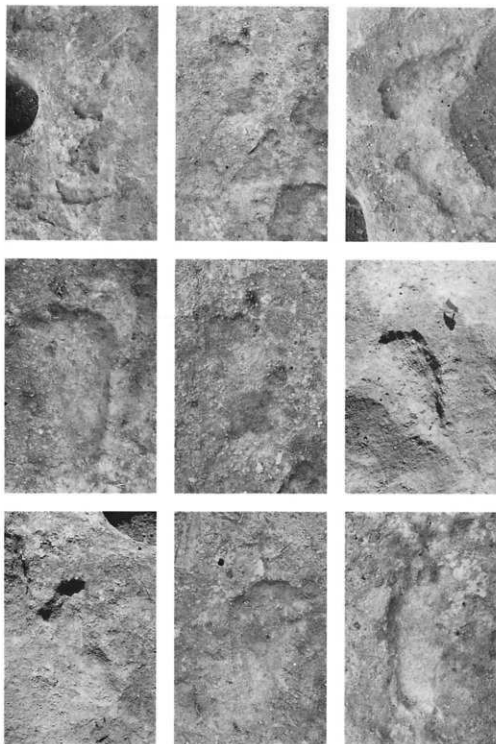
図版 8 4号住居跡内の足跡



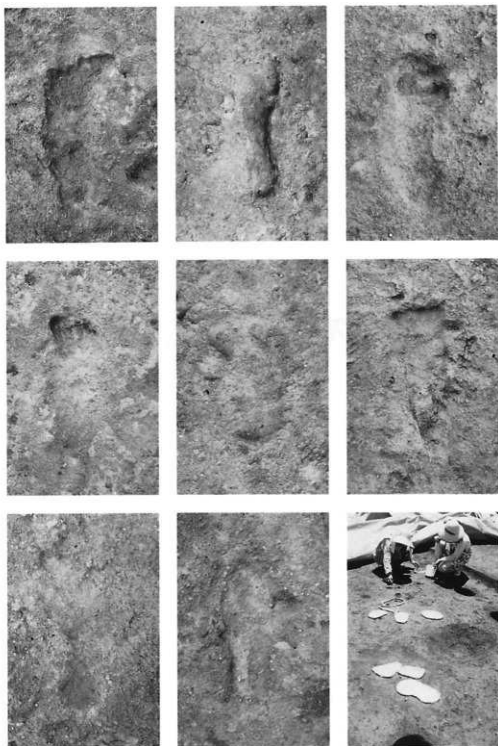
図版 9 7号住居跡内の足跡



図版10 8号住居跡内の足跡(1)



図版11 8号住居跡内の足跡(2)



図版12 8号住居跡内の足跡(3)



図版13 9号住居跡内の足跡



全狀



1号



2号



3号



4号



5号



6号



7号



8号



9号



10号



高木1号



1号



1号



2号上



2号下



3号



3号



4号



5号上



5号下



6号



7号



8号上



8号下



8号下



9号



9号



10号上



10号下

諏訪原遺跡

平成8年3月28日 発行

編集 益 永 浩 仁

発行 菊水町教育委員会

〒865-01 熊本県玉名郡菊水町江田3886

印刷 凸版印刷株式会社
